Oct. 1890
No. 235

女學雜誌

社説　モルモン宗

論説　小笠原氏禮論

明治二十三年十月十八日發行
第二百三十五號
一冊六錢。毎土曜日發兌

言文一致は昔からある　五々生

一家評　雲峯子

女學雜誌の評　愛山生

磯筆草　花圃孃

處女よ處女よ勿ニ結婚一

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 235. OCTOBER, 11TH. 1890.

EDITORIAL :—Mormonism.

MISCELLANEOUS :—Discourse on the Japanese Etiquette. (Ogasawara Leimu) "Sketch on the Sea-shore," (Miss Tanabe Kaho) Congratulating Poem to Mr. and Mrs. Iwamoto. (Isogai Unpō) Mother of the late Yoshida Torajiro. A Strange News Among the Europian Women. (Hinodeya Kaworu) Near the Lamp-light. (Donfū Riushi).

HUMOROUS. (Sharakusai) The Uneducated. "The Child is more precious than a plant."

CRITICAL NOTES :—Critisms of "Woman's Magazine."

PERSONAL CRITICISM :—The Literature of the News Paper. The Literature of the Magazine, (Unposhi) Rhymes. "Musashino Paper." "The Light-house of the Short hand writing." (Unpōshi). The Colloquialism has been prevailing since early times. (Gogosei).

NOVEL :—

OPEN LETTERS.

CONTRIBUTED ARTICLES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

第二百三十五號目次

●社説 モルモン宗

●雑錄 禮論（小笠原清務）○磯の筆草二（田邊花圃女史）○鬼も心の眼には（天知子）嚴本兄姉に寄する祝歌（磯貝雲峰）○故吉田寅次郎氏の母○歐洲女界奇聞（在米日の出屋かほる）○燈火の下（鈍風流士）○きよめぬ庭文盲○子は草木よりも尊とし

●小説 小公子（若松しづ子）

●批評 女學雑誌の評（愛山生）

●一家評 新聞紙の文學○雑誌の文學○韻文（雲峰子）○むさしの新聞○土曜報知（新誌子）○露光○速記の燈臺（雲峰子）○言文一致躰は昔からある（五々生）

●寄書 眞正の改革家（川合信水）○帝國代議士を汚辱せるの行爲にあらずや（今井謙造）

●交詢 一書生○於無劣生○安中任評生○速記學○牛乳と食物○離婚、再婚

●時事 女教師、學務委員○馬鹿らしきは斷迄に候○帝室技藝員○小學校令○婦人矯風會○若松女學校○新聞、最新聞○なるべし○多妻宗、教基を變へんとす（米國かたる）○日曜日休むべきの議（貝海子）○四徒及幼者保護

●海外通信 十件

●通信 四件

●宮庭錄事 二件

●片々錄事 十三件

●廢娼記事 四件

N. W. C. T. U.

SUPERINTENDENTS OF DEPARTMENTS.

III. EDUCATIONAL.

Scientific Instruction—Mrs. Mary H. Hunt, Hyde Park, Mass.; Literary Assistant, Miss Emma L. Benedict; Associate, Mrs. Geo. S. Hunt, 165 State St., Portland Me.

Sunday School Work—Miss Lucia E. F. Kimball, 644 W. Monroe St., Chicago, Ill., or Woodfords, Me.; Secretary, Miss Julia A. Bidwell, Hartford, N. Y.

Temperance Literature—Miss Julia Colman, 47 Bible House, New York City; Advisory Committee, Mrs. Helen E. Brown, Mrs. E. W. Rulifison, Mrs. E. M. Wymond, Mrs. Dr. A. Buchanan, Mrs. W. Vigelius, Mrs. J. C. Craw, Mrs. M. E. Morgan, Mrs. Dr. H. McLean, Treasurer, 205 Mason St., Brooklyn, N. Y.

Woman's Temperance Publication Association—Miss Alice M. Guernsey, Editor Department Books and Leaflets, 161 La Salle St., Chicago, Ill.; Mrs. T. B. Carse, Publisher; Advisory Committee, the National President and Corresponding Secretary.

Editors of The Union Signal—Miss Mary Allen West, Miss Julia A. Ames, Mrs. Elizabeth Wheeler Andrew, 161 La Salle St., Chicago, Ill.

Editor of the Oak and Ivy Leaf—Miss Margaret A. Sudduth, 161 La Salle St., Chicago, Ill.

Editor of The Young Crusader—Miss Alice M. Guernsey, 161 La Salle St., Chicago, Ill.

Presenting our Cause to Influential Bodies—General Officers.

The Press—Miss Mary Henry, Evanston, Ill.; Mrs. Georgia Hulse McLeod, Baltimore, Md.

Relation of Temperance to Labor—Mrs. Anna Sneed Cairns, Kirkwood, Mo.

W. C. T. U. School of Methods—Miss Mary Allen West, 161 La Salle St., Chicago, Ill.; Parliamentary Usage—Mrs. Anna S. Benjamin, Portland, Mich.; For Practical Training to Public Speakers, Mrs. Anna B. Curry, Boston School of Expression.

Department of Narcotics—Mrs. E. B. Ingalls, 4119 Westminster Pl. St. Louis, Mo.; Lecturer, Mrs. James Havens, 673 Broadway, Denver, Col.; Mrs. Helen L. Bullock, Elmira, N. Y.

I. ORGANIZATION.

Miss Frances E. Willard. Mrs. Caroline B. Buell.

Organizers—Mrs. Sallie F. Chapin, Charleston, S. C.; Miss Henrietta G. Moore, Springfield, O.; Mrs. Lucy H. Washington, Port Jervis, N. Y.; Mrs. Mary Read Goodale, Baton Rouge, La.; Mrs. M. L. Wells, Chattanooga, Tenn.; Miss Frances E. Griffin, Montgomery, Ala.; Mrs. Helen L. Bullock, Elmira, N. Y.

American Organizers for World's W. C. T. U.—Mrs. Mary Clement Leavitt, 830 12th St., N. W. Washington, D. C., Miss Jessie A. Ackerman, Sacramento, Cal.; Miss Charlotte Gray, Christiania Norway; Mrs. Sallie F. Chapin, Charleston, S. C.

Work among Foreigners—Mrs. Sophia F. Grubb, Lawrence, Kan.; Secretary, Mrs. S. A. Brown, Lawrence, Kan.; Scandinavians, Mrs. K. A. Ostergren, Ogema, Wis.; Hollanders, Mrs. Mariette S. Van Olinda, Holland, Mich.; Chinese, Mrs. M. S. Carey, 506 S. 2d St., San Jose, Cal.; Sclavic Mrs. L. G. Sobieski, Neosho, Mo.; Spanish, Mrs. E. J. Harwood, Socorro, New Mexico, German, Mrs. Julia Fischer, Wheaton Ill.; Department Evangelist, Mrs. C. H. St. John, Beloit, Ka.

Work among the Colored People—Mrs. Frances E. Harper, 1009 Bainbridge St., Philadelphia, Pa.; Associate, Mrs. S. J. H. Early, 260 S. Cherry St., Nashville, Tenn.

Young Woman's Work—Mrs. Frances J. Barnes, 146 W. 103rd St., New York City. Department Secretary—Mrs. F. S. Evans, 155 West 48th St., New York City; Organizers, Miss Ida Clothier, 36 Bromfield St., Boston, Mass.; Miss Jessica Morgan, Oberlin, Ohio; Miss Mary McDowell, Evanston, Ill.

Juvenile Work—Mrs. Helen G. Rice 1597 Washington St., Boston; Associate, Miss Anna A. Gordon, Evanston, Ill.; Organizer and Chalk-Talker, Mrs. Ellen A. Blair, Creighton, Neb.; Kindergarten Mrs. E. L. Hailmann, La Porte, Ind.

II. PREVENTIVE.

Health and Heredity—Dr. Orpha A. Baldwin, 216 J. St., Portland, Oregon. Associates—Health—Dr. Mary Allen, Ithaca, N. Y.; Heredity—Mrs. R. A. Armstrong, Wondland, Cal.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百三十五號 明治二十三年十月十八日發兌

社説

モルモン宗

近着の新嘉坡新聞に、九月廿六日倫敦發の電報を掲ぐ。云く、モルモン宗の宗長は、同教會に代り、誓つて一夫多妻の制を排斥したりと。

之より先き、在米國桑港の吾女學雜誌通信者は、モルモン宗内近ごろ將に斯る變動ならんとする由の報道を寄せぬ、則はち其文載せて本號の時事欄内に在り。惟ふに、通信者が謂ゆるウードラップの宣言、異議なく全宗徒の協贊を博し、遂に此の祝すべき美なる決議を爲しつることと見えたり。

抑も、此のモルモンと云へる一宗派は、今を距る六十七年以前の頃ろ、北亞米利加に於て初めて出現せるものにて、最初ジヨウセフ、スミスが主唱する所ろより起れり。スミス、年少くして頗ぶる賢こく、長じて大法師たらんとするの野心あり、屢ば天精に感ずと揚言して毎度不思議なる幻想を述ぶることもありき。一千八百二十三年九月廿一日。彼れ大默示を蒙むれりと稱して云へらく、昔しイスラエルの分派のうち、或るもの流浪して北亞米利加に渡來し、最后にモルモンと云へる大豫言者出て、其子モロニ亦た父に嗣ぎ、數多の豫言を爲しぬ、其言葉刻して石に遺り、其石パルミラを去る四英里の處に埋もれりと。翌る朝た、スミス其處に行て、石面の文字を讀むに、新埃及字にて綴れり、則はち流讀し且つ飜譯して之を書留めたり。時に他に何人も之を見たるものなし、然れどもスミスが此を見たりと云へることを證するもの十二人ありと。斯てスミスが一讀したる后は、其石自から消失し最早形ちを存せず、必竟此の大豫言者に天の默示啓かれたるもの也と言ひ觸らす。斯て、其飜譯したるものを十二の卷に掲載し、一千八百三十年公版して世に示す、即はちモルモン宗の聖典なるもの是也。

右聖典の記す所ろに依れば、此宗亦基督教に似る所ろ尠なからず、但だ六つ七つの大に異なりたる信仰を有するを相違となす、其主なる信仰箇條を舉れば、左の如し、

一 神は人類の如く、肉を有し、形を有す。

二 人は神躰の一分岐にして、他日亦神となる。

三 人は神に依て造られしに非ず、永遠より存す。

四　人に元罪なし、但だ自から犯す所ろにより初めて罪を生ず。

五　天地間に靈に肉あるもの多く存し、地球の如き數多の住所に棲息す。地球は斯る住處の一つなり。

六　神は永生あるものゝ主長にして、其下に四の永生者即はち靈物あり。〇一を諸神と云ふ、靈肉完全したるものあり、人類が進化したる時則はち此諸神の一となる。〇二を天の使とす、未だ神とならず、律法に從つて現世に消遙するなり。〇三を人類とす。〇四を靈氣とす、未だ宿るべきの肉を得ず、虚空に漂々居す。

七　人は婚姻することにより異日神となる、其妻子眷族は當日天に於けるの家來となる。

敎理の笑ふべきは、抱腹の限りにして、迚も智慧ある人の信じ得まじきものありと云へど、斯る新派の起るも亦偶然にあらず。新移住の民魯鈍にして純高偉大の理はりを信ずることかたく、永遠未來、天上絶高の敎へは、卑近實際の修德に効うすきの嫌ひもありければ、扨はスミス時弊を察して斯る新宗派をも開きたることにて、彼が衷心必らずしも笑ふべきもの耳にはあらず。

苟くも大に世を動かすものは、幾分の誠心なかるべからず。スミスが徒、宣傳する所ろ熱心にして、能く千百の艱困を忍び、最初たゞ三十人の信徒なりしが、住ふ場所を追立られ、祈る會堂を毀たれ、到る處ろ干戈を以て傷害せられたるに關せず、最後ウター州に居住してより、信徒大に增加し、荒地頓變して美田美野に化し、遂に米洲著名の黄金境となりぬること、亦一方ならぬ熱心と眞心との熾なりしが爲めなるべし。吾人其信仰の誤まれることを悲しむと云へども、亦其信仰の異なれるに由つて到る處ろに迫害を蒙むりつることの極めて憫然なるを憐れむ。

但し、モルモン宗にして、最初其發表したる丈の信仰箇條にて畢りたらんには、左して世間實際の道德を害することも多からざりしなるべし。男女みな働らくと云ふことを天職と心得、獨力自活てふことを第一と覺悟し、朝まだき男子は野に出でゝ耕やし、女子は牝牛の乳を搾り、黄金を積んで傳道の爲に使用し、互ひに正直にして相欺かず、深く愛して異日天上の神となることを樂しむの精神に至つては、必らずしも無みすべきものにあらず。然るに、敎祖スミス肉慾の奴となりて妻の外に三人の女に通じ、之を辨ぜんが爲め怪しからぬ說法を爲し、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

引續きて第二の宗長ブリグハム、ヨング、一夫多妻の制度をよしと宣言したるより此の方、モルモン宗は最早寛量をもて容赦すべからざるものとなりぬ。實に、一千八百五十二年即はち三十九年以前の八月二十九日、ヨングが此の奇怪至極の教制を可定したる以來、モルモン宗は万國民の詛ふ所ろ、擧つて痛撃酷斥すべきものとなりぬ。

ヨング云はく、婚姻は人の盡すべき義務の最始最重のものなり、男も女も只だ獨りにては神の御心を行ふと能わず、相婚して成るべく多くの子を擧げ、今や將に生れ出んとして宿るべきの肉あれかしと待ち居る數多の靈氣に其宿を與ふべし、左れば婚姻は神の攝理の爲めに大ひなる仕事を爲すもの、又人の義務中の尤とも神聖なるもの也、之を爲さぬものは罪を犯すに均し、故に婚姻せざるものは、モルモン宗に於ては、不完全の人と見做す、翼なき鳥の如く、魂しひなき躰の如く、不完全の受造物と見做す、左れば愛情は人を高くする勵ましの如く、肉慾は之を程好くすれば己が靈性を養ふの導となると。彼は人世を樂園と見做し、人の好みを上なきの律法と思ひ、愛戀慾情を以てたゞ神聖なるものとのみ誤解せり、特に虚空に漂々する一種の靈氣の爲めに、其宿るべき肉を與へんとて、成るべく多くの子を生ませんとを計り、一夫多妻を神意に適するの教制と云ひぬ。此を以て其身は十二人の妻を十二ケ所に置き、合して四十餘人の子を擧げたり、而して其他所云る封約の契りにて婚したる婦人數を知らず、之より出生したる子幾人なるかを數へがたしと云ふ。封約とは、死せる郎君に代り、其寡婦に婚するものにて、寡婦異日死して天に登り先人と靈海の伉儷たらんとするの日迄で、他し男に我儘ある婚姻を爲さしむとて、特更に淸き人を撰び之に托して世に在る間だの假りの妻となるとなり。左れば、ヨングの如き、此宗内に於ける聖中の聖人には、自から封約を求るの寡婦多く、彼が途上を通行するの砌り、所々より招ねかれて假りの婚姻を請わるゝこと多かりきと云ふ。而して封約を爲すもの獨りヨングに限らず、他二人の大僧正、十二人の使徒亦皆な此に當るが故に、僧は妻なきものにあらずして、有妻者の中の特に妻多きものとなり、圓顱の人妻福滿々として、寺堂院裏亦子の聲一きわ喧びすからんとす、倫理を亂すと此上もなきとと云ふべし。

三

ヨング十四年以前に死し、ジヨン、テーロル代つて宗長たり、今やウタ－州に於ける同宗の信徒十五万人にして、他の州

に散在する同信の輩ら六万人に超ゆ。彼等は文明の中心たる米合衆國の央ばに割據し、倫理嚴正なる開化人のホームを、毒化惡染せしめ、男女の間だを汚らはしくすると、一と方ならず。左れば、代々の大統領は如何ともして此惡風を亡ぼさんとを計り、或る時には兵力を以て攻入りたるとあり、然れども抵抗左程に弱からず、漸やく敗北すと云へとも、其風習を改むるとなし。或る時は、裁判權を以て之を制服せんとすれど、姦通を極密にして、目に立ぬやうにし、法庭に効あるほどの證據をちとも殘さず。又或る時は、律法として多妻の制を一切禁止せんとすれど、合衆國の憲法、婚姻の制度を州々の自治自定に任ずるが故に、國會の議決を以て直ちにウター州の多妻主義を禁遏すると能わず。さまざまの工夫多くは失敗して、此の惡むべき汚らわしき毒風習尚ほ依然として存し、北米の西、万國に誇る星旗のひらめくと共に、紛々たる惡臭天地四方に發散するとを止めざりける。

左れど斯る惡風決して其儘に放任すべきにあらず、何如に平和を好み、人權を重じ、憲法を尊とむの米合衆國と云へども、最早非常の手段を用ひて、斯る大毒惡を驅滅せずんばある可らず。去年、國會議場に於て、全會惣起立の上、ウター州の多妻主義禁遏の事を可決し、

多妻を以て大罪惡と認定する事。モルモン宗の經濟上の諸集會を解散すと決するに付ウター州の知事は直ちに之を斷行すべき事。多妻者は投票權を有せざる事。ウター州に於ける投票者は合衆國の諸法律に循がひ、特に多妻主義に反對する諸法律に一々服従するとを必要とする事。ウター州内の女子投票權は一切剝脫する事。等、

を議定したり。モルモンの徒、何如に頑迷なりと云ふと云へども、最早其惡風習を依持すると難し、斷然改悔して即時之を止むべき乎、もしくは尚迷續し、遂に合衆國の正淸なる法律の下に苦吟すべき乎とは、吾も人も久く掛念して密かに彼の第二のジユウが飜然正に歸せんとを祈り居たる所なりき。

モルモン宗の宗長は、天に聽きて預言し、神意を承けて默示し、百の敎令を宜しきに隨つて、宣傳布告するの万能力を有つと稱す。宗徒皆な之に歸服す。今の宗長亦た尋常の人にあらず、國勢の趣むく所ろを察して、機運最早一轉せざる可らざるとを認知し、遂に之を廢止するとゝなれるなるべし。

男女伉儷の交らいは、神聖にして汚す可らず、肉の上の事にあらずして、靈海永生の上の契りなり、たゞ情慾の焔に燒かれて身をこがし、魂を害ふに至つては、悲しきと幾干ぞ、かゝる必要を以て、一夫多妻を主唱するは以ての外の事なり。ヨンク一流の輩らが言へる、所云る肉あきの靈氣に宿りを假すが爲めとすとも、吾人は實際の倫理を破り、目前ホームの

大害惡を醸して、而して無形漠々の靈物の爲めに、大罪惡を侵すと能はず。全世界男女の數ほゞ同じ、天は固より一夫一婦を命定す。左れば、たゞ人の數を多くせんとするにも、一夫一婦に婚するを好とす、若し一夫多妻によつて人口を殖さんとせば、貴族弱質の人大率ね妻多く持ちて、强壯剛性の人一生妻なきに怨み、生れ出る子弱くして死すると多く、强きもの、種漸次に滅して、世界の人口大に減ぜんとす、故に人口增殖の上より考ふるも遂に一夫一婦の優れるに如かず。况んや、夫婦のかたらいは只だ二人にして睦まじく行ふとを得、妻多くして男一人に歸する時は、其家怨恨嫉妬の修羅城となつて、ホームは此世のものにあらざるべし、見よ人情至愛を求めんには、上なく並びなきとを要す、然るに、一男が寄する所ろの愛數人の上に分配せられ、數人の妻の愛たゞ一男の上に集合するに於ては、與ふるものに至情至愛の惰けなく、受くるものに無上獨一の樂しみなし、かゝる間柄に何如でか、最極の交はりあらんや、妻は妾の如く、夫は王の如く、夫婦はたゞ肉慾の上の契約者となるべし、事情此に至れば神聖の愛育たずして、下賤卑劣の慾大に跋扈し、男女を驅つて、只だ豕鷄の群と爲さんと欲す。

夫れ、全世界に於て、唯だ此男子、唯だ此の女と見極め、一生の同伴を相約して、死后の和樂を理想し、流轉極まりなき間だに家の礎を据え、變化定まりなき浮世に共に浮沈し、怨らくは同じく生れず希ふらくは一日に死せんと契りて、身一つ魂一つに化して、六合八荒の中間に、此に吾等二人ありと握手同行するの親睦は、豈に天使の喜こぶ所ろ、上帝の笑む所ろ、万物の贊美する所ろにあらずや、ミルトン、よく兩々双々の甘まく、パラダイスに樂々するの狀を畫く、

So, hand in hand they passed, the loveliest pair
that ever since Love's embraces met—

手に於て乎、無上愛好の一對相扼して行くは、盖し是れ戀愛が相和し相抱くの狀なり。たゞに歡樂の時のみにあらず、よし樂園を追出され、共に泣き汗して働らくの地に追放せらるゝの時と雖へども、彼の相扼したるの手は遂に離るとなし、

They, hand in hand, with wandering steps slow,
Through Eden took their solitary way.

亦た相抱き、逡巡遲疑として見かへり〳〵、共に花園を通り、さびしき道を歩み行くなり。

誰か、二人和樂の幸福を味わずして、鷄豚の卑陋に甘んぜんとす。ウタ—州サルトレーキトの多妻數は既に滅絶したり、之に類するの惡風習豈に遠からずして絕滅せざらんや。自から隠れずと言ふ乎、吾人は之を沈壓せざる可らざる也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

女學雜誌の評

世間から賞られて居る、殊に貴婦人原より好評の冠を得給へる、花の盛りの女學雜誌に向て、武骨なる田舍兒底の激語を呈せんとは自ら好んで憎まれ子となるとであるを知らざるにはあらねど、遠江の風は暴きが故に松の根堅き由、此頃農人に聞く、時としては酷評苛論も彼女を強くするの手段となるかも知れず、予は此理由に因て此文を艸せり。

在遠江　愛山生

(第一)女學雜誌の好運　女學雜誌は彼女の性情と境遇とが稍相和せし當時に生れしかば、好運を有つとの幸福を得、而して恐るべき反動の風が彼女の境遇を蔽くせんとする今日は彼女は既に其根を深くし其土を堅くせり。此點に於ては彼女は國民の友と殆んど同じ福運の下に立てり。二者皆敵の來らざる前に城を高くし、壘を深くすることを得たり。若し「國民の友生れたり」の口調を以て、其「マンチエスター」的經濟主義を以て、其耶敎道德を以て、今日に生れしめよ、無數の非難、冷笑、譏誑、罵詈は其愛仔の頭上に雲の如く群りて、其靈慧なる特處を發揮し能はざらしむると、猶爾の大江義塾が國權論者の圍繞中に惴々たりしが(形容的に言ふ)如けん。然り、男女情交論を以て理想紳士論を以て「ホーム」論を以て骨子とする爾女學雜誌をして榎本武揚氏をして儒教主義を唱へしめし現在に生れしめば無殘なる雨は必らず爾の柔條を折り了せしならん。故に予は感謝を以て深く此二個の長城が天運の保庇の下に我主義の爲に殘されたるを喜ぶ。然れども長城にして胡を防がずして胡を歡迎し、若くは怠りて眠れる番兵たらば我主義は更に他の長城を作るに非んば危に瀕せるなり。嗚呼我主義の長城よ、予は爾曹が其「ミツシヨン」の太だ高大なるを認めて戰々兢々たらんとを望む、又剛々毅々たらんとを望む。

(第二)女學雜誌の主義　女學雜誌は泛々として生れ出たる者に非ず、彼女は始より預じめ向て進むべき理想を有せしなり。而して彼女の圍繞物は今ガリラヤの海の如く彼女なる舟を動しつゝ、もみつゝあり。然れども予は今日まで彼女の主義に於て變色を見ず、彼女の好伴侶であるべく待設けたる國民の友(敢て民友子と云はず)は毫しく其氣焰を減ぜしやに思はるゝ節あきにあらねど、彼女は寧ろ一層大なる長虹を吐つゝあるが如し。彼女の今日に於て其新伴侶と思はるゝ日本評論と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

共に一は凌々たる俠骨を以て一は切々たる紅涙を以て、其主義を一層公然に、一層大膽に開放しつゝあるは、予は思ふ、是れ善く場合を知る者なりと。反動の強くある所には正動も亦強くあらねばあらず、若反動の強きが爲に其渦流の中に捲去れんとし、若くは曖昧、不言、變形の中に隱家を求んとするが如きは自保の道には賢きことなるべけれど其獨自一己は腐るべし。予は女學雜誌が優に獨自一己を保有するを高しとなす。

(第三)女學雜誌の多情　女學雜誌は一の著き性癖を有せり。彼女は萬斛を藏する涙嚢を貧民の爲に儲へたり。彼女は何時にても慈善、救恤の聲に反響す、又他をして反響せしむる勢力を有す。加之彼女は多情の眼睛を睜りて世に輕蔑せられし文人、盲千人の爲めに當面蹉過せられし美術家をも世上に紹介せんとせり。彼女は名も知れぬ學生に對して濃情なる弔詞を作り、田舍の獨學者の爲にも種々の便利を供給せんと勉めり。此邊に就ては彼女は公平と云はんよりも寧ろ偏頗なり、然れども其偏頗は紅涙的々たる多情より起れる偏頗なり。思ふに彼女が世に時めく者より世に知られぬ者に偏し。望を達せし者よりも望を懷く者に偏し。溢れる者よりも涸れし者に偏して同情を表することも彼女をして世より評判を受取らしめし一原因ならんか。天秤の一方に重物を置く者あれば、更に他の一方に重物を置く者なかるべからず。彼女が調子ハヅレなるは寧ろ社會の勢力平衡に缺くべからざる者なり。

(第四)女學雜誌の躰裁　彼女は恰も深窓の少孃が始めて交際社會に出しより、其怜悧ある資性に因て漸く其風采を改革しつゝある如く、當初の田舍娘らしき不格好、不整頓、は今や其滓渣を沈澱して立派になれり、壯重になれり、典雅になれり。然れども予は斷言す、彼女は必しも其躰裁に規々たる者にあらざりしなり、唯彼女を圍繞する男女の朋友(諸雜誌を云ふ)が漸く其衣裳を美くし其躰度を柔かにしつゝありしを以て彼女も亦不負魄にて此に至りしのみ。彼女は本領あり、故に主張する處あり。彼女は靈化されてあり。彼女は女にして預言者たらんとする者なり。洗粧拭面著冠帔、白咽紅頰長眉青。分明に彼女は這般の女道士あり。彼女を敬ふものは其衣裳の下に潜む彼女の心胸を愛すべし、而后に始めて其躰裁を問ふべし。

(第五)女學雜誌の議論文章(特に其社說に就て)　予は世論に反對するか知らねど、愛讀者の怒に觸るゝか知らねど、彼女は世の思ふ程の文章、世の思ふ程の議論を有せしものに非ずと云はんとす。彼女は其文躰に於て國民之友をば敵を受べき

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

長兄とも仰がざるべからず、何となれば彼女の文躰は未だ成熟せざる處あればなり。彼女と日本評論(是亦其社說に就て云ふ)とは共に此欠典ありと余は思ふ。國民の友が文躰に於て彼等より長ずる處は、其和漢洋の雜躰たるが爲に非ず、其和漢洋の三躰が能く調和して其獨自一己を成したればなり、更に之を換言すれば國民の友躰なる文躰を習練上(若くは創意?)より作り得たればなり。國民の友は既に配合、調和を文躰に於て成遂たり。女學雜誌は未だ形骸を全せず。

又其行文に於ても女學雜誌には(一)對句若くは間接の對句多く從て其意味の簡潔を害し。若くは(二)文の段落此趣意と彼趣意と相連絡せんとする過渡の處、千丈の斷岸を隔てしが如く意脉の流通なきに似たる者ありて論意の明斷を失ひ(三)傍論閑話を多く點綴して本論に遠ざかり、更に多少の斧痕を殘して本論に立返るが如き(四)知れ切たる事理を長々しく論じ文學上の所謂半は全躰より大なりといへる省筆の法に拙なるが如きは猶未來に於て圓熟に赴くべき半途に在るを證する者なり。

女學雜誌の議論は熱心の調子を有すれども靜かなる甚深の創意思力を顯はさず。彼女は善に與し惡を惡むの情太だ熾盛にて其焚されたる心より其筆を動かすが故に、快聽に堪たる文字は多けれども、其情の衣を脫ば、彼女の論旨は既に世上先づ唱へしものありしを見る。彼女は善く應ず、然れども善く創る者に非ず、彼女は泣く、然れども泣する者に非ず。彼女は詩聖論を作りて詩人出てよと呼び太だ西行法師に感服せりと云ふ。彼女の詩聖論は嘗て民友子が屢々論じたる詩人論と其論旨に於て何程の差ある?。僧西行を世上に紹介せし人は我黨に在ては彼女、評論記者(植村君を云ふ)に後れたり、後れたるだけに詳しかりしのみ。彼女の廢娼論は千變一律なり。千變一律なれども猶金石の聲を爲す理由は、彼女の熱心なる腦を經て來ればなり。彼女は「グード、センス」を有す「ゼニアス」は未だし。予は彼女の進歩せんとを願ふが故に酷論す。

女學子附言。愛山生は嘗て「關新助君」を演述して加藤大學總理に舌を捲かせたる批評家也、今ま其の女學雜誌を評せらるゝを讀むに、短所を擧ぐる所ろ頗ぶる當れり、蓋し凡手にあらざる也。

一家評

曇峯子

○新聞紙の文學

今日は新聞紙の文學稍衰運に傾くが如し、尤も立ちたる新聞紙中郵便報知、國民、讀賣の三新聞最も多く文學に關する事を揭ぐ、吾人は、三新聞が各文學海に多少の勢力あるを知る。

其特有の長所を擧ぐれば國民新聞は批評的なり、讀賣新聞は小說に得意なり、報知新聞は隨筆物に妙を得たりと云ふべし。望むらくは各愈其長所を發養して、淸美高潔の文學を奬勵せられん事を。其他の諸新聞に於て見るべきの文學甚だ少なかるまじ、されど多くは政治海に重きを置き、文學は餘業の如く見ゆ。世に存するもの悉く果すべきの天職あり、政治に盡すべきもの必らずしも文學を共に爲せと云はず、其他二三の小新聞あれど吾人は此等に望む所なし、蓋し我文學海に勢力を得る事なからんことを欲すればなり。

○雜誌の文學

日くしがらみ草紙、日く國民の友、日く日本評論、是を今日文學に關する雜誌の重もなるものとす。其他は多く一に偏す、例へば都の花、江戶紫、新作十二番（へ若雜誌と云ふべくんば）の如く小說に偏す、其他誹諧を專らとするあり、政治に熱中するあり、雜事を集錄するあり、多少文學に關すると云へども、未だ文學雜誌と云ふ能はず。若小說家の云ふ如く文學とは小說を指すものならんには尙大小幾多の文學雜誌あらん、されど吾人は文學海を擧げて小說のみと云ふは甚だ不可なりとなす、是小說雜誌を以て重もなる文學雜誌に加へざる所以なり、吾人は彼の重もなる雜誌が、先きの三新聞の如く各特點長所を有すと思ふ、今日に於ては雜誌の文學は少しく氣力を得んとするが如し、三雜誌に望む所は先の新聞につきて云へるが如し。

○韻　文

今の昔、指折り數ふれば數月前、山田美妙氏が韻文論の著ありと聞たりけり、爾來鶴首長頸以て其世に公にならんを待てり、去んぬ三日發兌の國民の友に揭げ初めしは是なん待ち望みし韻文論なり、我國今後の文學上に一大問題となるべき韻文の事、讀者と共に吾人は刮目して見んとす、今日迄小說の流行せしを以て直ちに文學隆盛と思へりし人の迷夢を覺醒せんは近きにあるべし、生れながらにして大人たるものあらず、亭々空を突くの大樹も始めは是二葉のみ、今日の韻文もとより幼稚なり、不完全の點多きは論を要せず、苟も我國文學の前途を思ふ人は力を協せて其發達を計らざるべからず、之を見て文壇の悪鬼と云ふは甚だ不當の見なり、吾人は之より韻文の愈發達せん事を望みて止まず、美妙氏の論文の如きは他日全班を閲して云ふ所あるべし。

○むさしの新聞　　新　諦　子

十月十二日第一號發兌。特別寄書に津田仙氏の富國論あり。雜報第一筆に、爾爪は實益あり。雜錄にこよみの事あり。何となく百姓じみ、自づから實業的新聞の心地す。左れば其序言に云く、むさしの新聞は生れ乍らにして學術と實業の精神を有し兼て此精神を使用するの筆を握れり。

○土曜報知　　同

北村三郎、中島勝義、正直正太夫諸氏などの文も見ゆ、土曜每の報知との意味なり。眛裁賞しく、文字みにくし、之と云ふ殊特の長所あるを見ず。左れど追々に發達するとなるべし。

○露　光　　雲　峯　子

一種の文學雜誌にして其第一號を麻布少年會より發兌せり、紙數僅かに十八、眛裁は江戶紫に類す。載する所主もに小說ならんか、公賣するものにあられば會員にのみ別つとのことなり。一號には麻溪、楊、霞仙女史、權花、風雷子、眉山諸氏の作あり。吾人は之が發兌を祝し、併せて健かに發達せん事を祈る。其揭載のものにつきては他日筆を新めて評する事あるべし。

○速記の燈臺　　同

文明愈進んで、世間益繁雜となる、諸機械の發明を要する理の睹易き事なり、我國從來（數年以來なるべし）速記の方行はれ大ひに便益を世に與へたり。今日本速記器學院にて敎授する速記の方法は一種の速記機械を用ひ其速き事、通常速記の三倍なりと云ふ。之を練習する亦甚だ易き事なりとぞ。若聞くが如くんば其法にして速く世人が其便益を利用せられん事を希ふ、速記の燈臺と題する雜誌は即ち此速記器學院より發兌するものなり。但し速記業報の近號につきて見れば、此新速記方の廣告は、藥屋の効能書、奴の口ほどのものなりと云へり。未だ何れか眞なるを知らず。

○言文一致躰昔はからある

勢の津　五　々　生。

われ美妙齋氏の手になる以良都女といへる雜誌あるをきゝ、奈何なる躰裁か一見したしと思ひ居りしに、此ごろさる友達の訪ひきたりて話しの折、不圖かの雜誌を携へ居りしに眼とまり、拜見といへばたやすく續號もあるからとて皈へりての后また四五册を送り越せり、われ親切者よと獨り語ちてこれでまづ購はずとよければ幾錢かの儲けなり、よし／＼と圖太く搆へて繙きけるに文藝美術を初じめとしていろ／＼面白き記事ありけるが、その文草あたまから今の所云言文一致躰なりけり、われうるさしと疊み附けしが、されど美妙齋氏の支配したまふ雜誌かと思へばなるほどとまた太切にひろげたり、さてうざ／＼として十二三册見るか見やすに午迄潰して、此奴馬鹿／＼しと午餐の膳に對ひても、片箸耳に挾んで腕を組めば兄様どうなさるると弟に聲かけられ、茶は沸えしかとその塲は茶かして匆々搔込んでわが部屋に駈戻り、しやつの胸釦に頤をふれさせ、思按すれば不審もや／＼と起こりてやみがたく、そこでひと筆ぶんなぐると下のごとし。

人あり疑ふ、果して「我國の言文一致躰が美妙齋氏より始まりし」(子)ものか、これが不審のおこりなり、これさへわかればこの外は皆枝葉なれば子細なきにさ、われつく／＼思ふに斯躰は決して「明治廿一の二月」(丑)美妙齋氏より始まりしものでなし、既に／＼百餘年前鶴屋南北が此躰を用ゐたる書あり、また六十餘年前の鳩翁道話も斯躰なり、この二ッはわれ實見したれどまた心學道話などもこの類なりときけり、なほ明治廿一年の二月はおろか「美妙齋氏が言文一致躰を思ひ付きし時すなはち同十九年の末ごろ」(寅)の已前、諸所に於て發刊せし古新聞ひるがへせば料理店の廣告、新年祝ひの廣告など多く斯躰なるを見るべし、求めればまだ外に澤山あるべけれど、暇まなき身の意に任せず輕少はもとより恐るゝ所、われ竊かに思ふに美妙齋氏とてこれ位ゐの小歴史知らざるにはあらざるべし、されば「明治十九年の末ごろ迄には俗談と違ふばかりが多かりしゆゑそれに刺激されて斯躰を思ひ付きし」(卯)といはれたれ、なるほど當時俗談と違ふ文、多かりしは事實ならん、されどまた違はぬ文も尠くなかりしにて全ッく無かりしにはあらじ、こゝ美妙齋氏の弱き所、詮あるまじ、されば斯躰はズット昔からありしにてたゞ今日のごとく盛(?)ならざりしだけなり、さるに言文一致躰ときゝて丸で新物のやうに取り扱ふこそ笑止／＼お臍が躍る、已上わがいひしところに誤りなからしめば言文一致躰の創始人、また美妙齋氏にあらず美妙齋氏はたゞ言文一致躰と命名して復興(?)せしのみ、今とわるべきが復興といへば或は昔の躰とは異なる所あれば復興にあらず矢張創始なりと辨護する人あるもしれざれど、世の開進につれて言、文の開進するは當然なればそれをしらずして吃つくは野暮なり、さても言文一致躰創始人は鶴屋南北がその前人なり、またその創始時代、これも明治廿一年の二月にあらず、明治廿一年の二月は命名時代、復興(?)時代のみ、眞の創始時代は百餘年前かその已前なり、されば世人今より翻然信を昔におけッ、爰にいはでもよけれどいはざれば氣にかゝることあり「今日の言文一致家は當初試驗の犧牲になりし」(辰)と、さて／＼今日の言文一致家といへば美妙齋氏等なるべけれど何、同氏等が犧牲になりしとは奇怪／＼、まと犧牲になりし人は鶴屋南北かその前人なり、美妙齋氏等は無理にいへば命名と復興との犧牲になりたる人なり、勿論その躰改良に劬勞(?)さるゝは犧牲といへず、それが犧牲なればわれ／＼とてもなし居れり、はて氣のきかぬ犧牲／＼とはあまり大袈裟なる大言にあらずや、世には他人のはたらきを沒してこッそりおのれ手柄顔にその成功を奪らんとするものあり、かれとられし他人こそ眞に氣の毒なれ。まづ此たびは右にておくべし、われ斯躰に就ては囀りたきと蟬の太皷にもゆづらざれど、まだ此あひだ小學卒業せしばかりなれば、いづれ單精してまたお目にかゝるべし、あすは雨ふり人はぬす人。(十月九日稿)

＊　＊　＊　＊

(子) 以良都女六卷、二二七面上段。　(丑) 同、　四六四面下段
(寅) 同。　(卯) 同。
(辰) 同、　二八六面下段、

＊　＊　＊　＊

每號寄書らんの鈌けしとなき女學雜誌、名文堆かくひまらやのごく、また五々生の醜文(醜聞ときこえる)載るところなかるべけれど、瓦落多雜誌なればほこりつもるとも申すべき極狹き片隅、五號活字それでは匆躰なし、六號七號のべたごみ何を厭ひ申さうや、見えさへすればそれで不足なき五々生、諸手合して意地わるくもたのみいるになん、これを叶へて下されし上にもひとつ望蜀の胴慾、おきゝ下され五々生の醜文、これに何とか御評を賜りたきもの。

十月十日　五　々　生、平　伏。

女學子私評。說のよしあし未だ知らず、句調の少しく罵り氣あるは感服しがたし、されど文に一種の氣骨あり、着眼亦た凡ならぬ所ろ見へ、宏量なる美妙子の微笑一考の料にもならんかと、敢て掲ぐ。附て言ふ、女學雜誌第百八十號に言文一致及雅俗析衷の二躰古よりあるを略論せり、幸わいに一覽を賜へ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄

禮論

小笠原清務

抑禮は天地の節文日月星辰天の禮也山川草木地の禮也三綱五常は人の禮也禮豈一日も缺く可けんや夫れ文明は禮に因て興る禮無くして豈之れを文明と云ふとを得んや天日月星辰其行を失ひ地山川草木其宜を得ず人三綱五常其倫を亂る豈之を文明と謂ふとを得んや人は萬物の靈也亦禮無くして可ならんや禮曰　鸚鵡能言不レ離二飛鳥一猩々能言不レ離二禽獸一今人而無レ禮雖二能言一不二亦禽獸之心一乎我朝古昔より禮を以て人民を教化せざるなし之を歷代の史に徵して昭々たり蓋上古は跪坐の禮なりしも中古に至て更に立禮の式を定られたり即ち日本紀天武帝即位十一年勅自今以後跪禮匍匐禮並止之又續日本紀文武御宇慶雲元年始停百官跪伏之禮同四年詔曰凡爲政以禮爲先死禮言亂々々失旨往年停跪伏之禮今聞内外廳前皆不嚴肅進退無禮云云今や中興維新奎運月に侵々乎たり萬國交際の道日に開け憲章典令之れ改まるの秋にして豈禮無して可ならんや時所位により禮を及す亦缺可からざる也泰西各國皆禮あり以て文明を六合に誇稱す嗚呼堂々たる我帝國の人にして禮を知らずして可ならんや夫れ禮は身を修むるを以て本とす身を修むるは其心を正うするにあり心正うして其體直し正レ心　直レ體而後始可レ謂レ禮矣所謂進退中レ度周旋適式是也況んや其根本たる心にして正しからず身修まらざるに於をや徒に輕躁浮華に流れ温恭和諧の狀なく其式法たるや虛禮徒飾となる又何の益あらん故に内心を養ひ外恭敬樽節の容儀を敎習練熟するときは倨傲粗野の醜態なく男は剛健にして粗暴ならず威儀嚴正の中自ら從容閑雅の風采を備へ女は柔順貞淑にして鄙屈ならず容姿嫁婉の間自ら凜然侵すべからざるの風致あらん然り而て進退容儀を學には胴作を第一とす是容儀を正うするの根本なり故に今我家に傳る所の躰用論の要點を撮して左に揭示せん曰く五躰は其本を正うすれば末自ら直し臍を張る心にて腰を居ゆべし胸に心在れば落附きて躰備はる若腰すはらざるときは放心す故に腰は本なり中なり腰よりして胴々よりして肩々に付たるは肘々に付たるは手先と股々脚々に付たる踵と一身のうち其本末を分ち其本を直くすれば其末なる筋骨も亦自ら直し又曰く躰は心を主とし四肢は躰を主とす又曰く心實して後外に求るを本理とすと是禮を習の大要あり然　則　正レ心修レ身は禮の本也恭敬樽節は禮の和なり乃ち容儀進退自然

の如く中度適式者禮の成る也然り而して禮を習ふは啻に修身に止まらず衛生の事に至ては同一と行はるゝ躰操と相並馳して徑庭なし如何んとなれば首として胸膈を豁開し一身の元氣を肚裏に充ち心思を爽快ならしむ乃ち頭部を直し四肢を正し其擧止一に法則に協はしむるを要す故に全身血脈適宜に調和し自然躰操の妙理に契合す夫れ人萬物の靈也人として禮を知らざれば五常亂る五常亂るれば鸚鵡猩々と何ぞ擇ばん禮無くして可ならんや禮豈一日も缺くべけん哉。

磯のふで草　（二）

田邊　花圃女史

それより、二日三日たちて後、又人々と共に、この山にのぼりぬ、この日はいたゞきにて、雨にあひたれど、この頃の常なれば、とみにさし出る朝日に、虹二すぢあらはれたるが、いと珍らかにて、谷より谷に、かけはたしたる、はてよりはて、いとあさやかにみえたり、これにて、雨にあひし恨みもあらじなどいひあひて、消ゆるまでみつるも、都にては二度見がたき景色なりし、一日〳〵とふるまゝに、こゝの人々とし〳〵いとこ女とは、親しき友たちなりしかは、おのれともへだて心なくまじはるほどに成にけり、男は皆信者にて、其道の事どもかたりて、おのれの心を、はげまさるゝも多かりき、十六日の午過る頃、狹きところ中々にへだてなくて嬉しなどいひつゝ、ものによりふし膝を交へて物語しつるついでに、とし〳〵の習ひなれば、これらの人々、箱根に行かでやみなむは口惜し、いかで思し立ずやといふ人のありしより、おのれにもと勸むれど、足よりまた心ひかれて、かにかくといひしらふに、叔母の君も、せちに勸め玉へば、さらば早きがよかんなり、おのれは都に歸るべき日も、ちかう成たれば、今日おぼしたちてんやといひしに、さらばとて俄に調度どもとりしたゝめ、六人して立出たり、男三人、女はおのれとも三人の旅なれば、心へだてなく、いとおもしろし、國府津まで滊車にてゆく、それより、一の湯へは、鉄道馬車に乗りぬ、三とせ四とせ前なりけむ、師の君と、再親の君と、菊見つるかへさ、この馬車にのりて、おのれ何となく危くおほえて、さめ〳〵と泣出しゝ、今も笑ひ草に成つるより、この車にのらざりしかど、いとおだやかにて、他にのる人もなければ、家にあると、いと心安し、かく六人して旅すれば、今に、はらからの如く人も思ふらめ、今より一人の男を兄とし、女三人を妹とし、他の男二人を、従弟と呼ばんはいかにといふに、皆喜びて、これよりは、お

のれも兄君姉君といふ、一の湯の、宿につきしは、日暮るゝ頃ありき、我この兄君、他の人々は、年々になれし宿なれば、家刀自殊に喜びて、清かなる一間に案内したり、いでゆ清くすみて、大磯の汐風に、くろうなりし肌も、白う見ゆ、いでこゝにて泳がんには、日にもやけず、又龍子君のと、溺れんとあかるべしとて、姉君笑ひ玉ふも、つゝまし、此宿の女どもは、誠の同胞と思ひてあしらうもをかし、心にこそしばしも離れずありけれ、兄君てふ言葉、再び我世に、いふ事もあからんなど思ひしに、計らずも一人の兄君まうけて、かにかくと、妹めかしく仕ふる嬉しさ限なし、わが誠の兄君には、年一つ劣り玉へど、この兄君も、年より増りて、おひ玉へり、かく睦ひあふさまを、母君に見せまゐらせましにはと、坐ろに涙ぐまる。

鬼も心の眼には

天知子

凛然たる勝聲、戞々たる竹刀の音、猛士腕を撫して壯血皆鳴動し、老士尚餘勇綽々として懦弱の氣を陥ひ盡さんとす、正に是れ劍術道場の光景。但見る一人の猛士、肩を張り目を怒らし大聲叱咤して一士と戰ふ、勇氣勃々万丈の氣焔を吐く。是れに對手たるの士は技術頗る此方より上達せるの人なり、一合又一合、一擊又一擊、技術の妙手封ぜられたる如く、見る〳〵猛士の勇氣に恐れて不覺の負とはなりぬ。劍術の大家千葉周作先生之を見て談りけらく、或流義に眼を怒らし肩を聳やかし恐ろしき容躰にて敵を睨み殺すと揚言するものあり常に鬼の面を居間に懸け置き睨みくらをして修練するといふ是れ對手を拉ぐの意にて一理ある事なり、今日の勝負は技術全く勇氣に壓倒せられぬ、然れども是れ肉の眼にて敵を見たるが故に、肉の形にて失敗せるなり、心の眼明かならば、いかで斯る事あるべき、練達すべき所なりと。實に知言なり。劍術の上のみ然るに非ず、世に斯る事甚だ多し、人間の弱き事以て益々知るべし。偉大肥滿の丈夫、赭面蓬鬢にて叱咤濶歩するの日遠からず、日本の人にして此儘武膽心眼なきに任せば如何、雜居日常其割を喰ひ、物品を横領せられ權勢を横領せられ、人物を横領せられ正理を横領せらるゝ事無きを得んや、所謂見識片々として卑く一寸の虫に五分の魂無きに至ば如何、心の眼暗くして男は氣で喰てふ江戸子の格言なきに至らば如何、天川屋義兵衛男でごんす、日本の男女亦膽を偉丈夫に化せしめよ、東洋に山椒の實あり曰小粒にしてヒリヽと辛しと。

巖本兄姉に寄せる祝歌

磯貝雲峯

一
あまつひかけ　いとのどかに
匂ひそめて　岩がねの
うごかぬ世に　生ふわかまつ
千代のみどり　うるはしき
とこしへに　おほかみの
めぐみのつゆ　ゆたかなれ

二
八千代までも　かはらざらん
いはがねをば　たのみても
世よそいづる　清きながれ
濁れる世の　かゞみあり
おほかみの　みわざこそ
いといみじく　たうとかれ

三
めぐみうくる　みどりこゝそ
こゝろすみて　みづのごと
みさをかたく　岩ねのごと
とこしへまで　かはらざれ
くまもなく　人をもる
かみのめぐみ　ふかゝらなん

（新撰贊美歌第二十五番の譜）

故吉田寅次郎氏の母

皇后陛下より香典として金壹百圓下賜はりし旨前號に記したる故の吉田寅次郎（松陰）氏が母の事に付左の通信あり。

華翰難有相見仕候吉田寅次郎母之事被仰尋甚た耻入候申上る程の善行迹も無之候廿三年九月十二日朝野新聞雜報にもちらさ出居候右に行年八十六歳さ有之候へ共八十四才にて御座候寫眞は一枚の外無之に付只今難差上候寫ども仕候て差出可申候○故杉百合之助さ申もの丶婦にて壯年の比より杉家貧にして餘程難澁子供も多し其央より教育の事には心を用ひたるものさ見へたり百合之助は廿六年前慶應元年乙丑年八月廿九日に死去せり其後追々難有　御代に遭遇致し過る十五年の冬下野國の藤田一郎來り寫眞を取歸り東京にて三條大臣閣下へ差出閣下より宮内省へ御差出に相成

天皇陛下　兩皇后陛下にも御覽を辱ふし奉り翌十六年八月十六日山口縣士族故吉田寅次郎母さ御切紙添ひ申白羽二重一疋宮内省大輔杉殿より在東京の身内の所へ御持參にて送り屆け候樣さの御沙汰に有之候○廿年十一月に病氣の事皇后宮被　聞食上御菓子一折下し賜りたり同年には舊君　毛公の御奥樣より御紋の七子の御羽織を下し賜り候廿二年十二月廿七日皇后宮陛下品川御料局長官を御側近へ被召出松陰の母に遣し度旨彌二郎ヶ取計奥さの　御言葉にて御包白縮緬一匹下し賜りたり又此度死去の事に付

金百圓

右贈正四位吉田寅次郎母死去之趣被　聞召　皇后陛下　御思召ヲ以テ下賜相成候ニ付　皇后宮大夫子爵香川敬三　旨ヲ奉ジ内藏頭子爵杉孫七郎ニ傳へ之ヲ其遺族ニ致サシム

右廿三年九月六日の事也寅次郎母名瀧子さ申廿三年八月廿九日流行症感冒にて死去す原生邊鳴地赤松大州金山佛乘の話をも能く承り眞宗の信心晩年に至り厚く相成候右之外可申上程の事無之耻入候（下略）

歐洲女界奇聞

在米　日の出や　かをる

妬夫愛妻を嫉む愈々酷しく
花嫁禮の裝して燭前に縊る

一千八百九十年九月一日獨逸ベルリン府より特別電信を寄せて曰はく…………………

去ぬる八月の三十一日の夕。獨逸の國。ヂイドとよべる一小村落に。最も悼ましき珍事こそ起りけれ。其をつゝまやかに申述れは。地方の法官として。名を知られたる。ヘーヤ、スコディック君は。一生涯の多部を。地方の郡縣の間に經過し今年取りて七十歳といへる。古へ稀なる齡を重ねし身なれぞ。物好には限わらぬものかは。氏も先の妻の已にみまかりければ。さすがにも獨だちにては暮しをへざりけん。また年はも行かぬ。今年十八なるいと若かき田舍育の乙女と契ぎり。祝言されしは。今より僅かに六ヶ月の前方なりき。

花嫁は田舍に生ひ育ちて。あどけなき性質。さるは生れし古郷と。良人の住はれし村市の外は。花の都もいまだ足踏だにせしこともなき。頗る可憐的の鄙そだちの美人草なるが。過る月頃より年高き良人の。手に導れつ。一度社交仲間に顔いだしそめしより。寃つみを招きたりけり。人の風姿なるものは。斯も俄かに變るものにや。忽ちに社交仲間の内にて。女王と仰がるゝばかり。衆口一致して賛美ければ。其が爲にや。頓かに燃ゆるは良人の胸の火焰。最愛の妻の嬋娟たる風姿美容には。良人は氣を狂はし。魂をも飛さんばかり。其の后は愛づる妻の快樂を縮むるのみかは。戸の外に出るをだに。嚴かに禁むることゝはなり。囚人にもいや勝さらめ。奇酷き良人の取扱ひかな　…………愛も度をはづるれば。かくも變化するものにや。今こそは愛てふ文字も。アラビヤナイトのおばけよりもおほこはかるべし。(支那の婦人ですらもかくまでは苛酷く取扱はれまじきに) かてゝ加へて良人はなほもあきたらざりけん。手術の及ばん限りは物事につけて。愛ずる妻の快樂をたち自由を妨げぬ。嫉みに暗む良人の白眼—悲哀に沈む妻の涙目も。互ひにかくとはさとらざりけん。……

斯る事客來の時のみかは。親み睦む友達にさへ。對面を拒み。いつもの構へ言としては。万が一のあやまちなからめと。是ぞ實に生涯のさちはひの羈をたちし。發端とはなれり。……

昨日の事なりき。例の法官は。親數友を客に招ねきて。もてなしし折柄。客のうちに二人の青年。見へたれば。またもうた

てく妻にむかひてかたく客見へするなかれと禁めけり。此日の夕方なりき。主人は客をもてなしつ。或は互に煙をくゆらし。或は戯事し。或は語りつせるうち。はや時分なりとて。酒宴を始め、やがて。之もをはりければ。主人は客人に向ひて。いざたまへと。客座敷に伴ひ。珍らしき器物。美しき繪など。見せあはせと。語つゝ共々に室の中ば入り來れば。こはそもいかに！客人の恐怖！主人の驚愕！これは何事です……嗚呼ゝゝしまつた〳〵可愛相や……彼方の眞正面の窓の帳幕に懸れる死骸は。まがふかたなき愛妻の……忘れがたなき婚禮の白打かけを身に粧ひ。頭髪には橙花の飾を被りしまゝ、正面に二脚の燭に火を點じ。あたりを拂ひ。清めつゝ。縊れし樣ぞあはれなる！鳥のまさに死なんとする。其鳴やかなし。人の將にゆかんとするや。其言や忘れかたなし……主人はいちはやく人を呼びて死骸を改めしに裳に縫付たりし一片の紙面ありけり。是ぞ臨終永訣の一語。酷なる良人への一鍼にと…………

"Cruel Suspicion:
My husband makes life more
Than I can bear."

邪推、無慚の邪推、良人はわが一生を堪へ難き者となせり。

嗚、苛酷なるかな嫉妬の禍神よ！汝は可憐清淑なる戀愛の天使を虐殺したりき！。

○處女よ、結婚する勿れ

米國女子青年會雜誌に云はく、處女よ結婚する勿れ、かの日暮れ、道暗き時、母が家路に急ぐを見ながら之を顧みず、御身を慕ふて來るが如き男子と結婚する勿れ。斯る人は他日婚して後、私欲に耽つて御身を捨てゝ顧みざるべし。

處女よ、結婚する勿れ

人、宗教の事を語り、聖經を敵ふる時輕しめ罵る人と結婚する勿れ。机上に横ふものは聖經に非ず、不信の心を記するものなるべし、之他日の不幸を前表する詔書の如し。

處女よ、結婚する勿れ

垢つかぬ袖口をつけたりとて、汚れぬ襟をつけたりとて、美しき頸飾りつけたりとて、之を見て直ちに結婚する勿れ、恐くれ其性質は袖口より汚れ、其義心は襟よりも弱く、頸飾りのみ身の中にて美しからん、袖口、襟、頸飾りの美はしきはよし、されど是よき良人の資格を成さず、是只仕立屋の看板たるべきのみ。

燈火の下

鈍風流士

秋の夜の淋しさ此山里にしくものなし燈火の下に憶ひ出たること一つ二つ、

(一)ふと憶ひ出でたるは我が家の知己なるさる老嫗あり。明治の初年に身逝りぬ、臨終のきは二人の孃子に遺言すとて。枕のほとり近く呼び寄せ。聞き玉へ女子の世渡りはいとむづかし。されど勤儉といふと一つ知りたらんにはいとやすきとなり、かの蛄蟖といひ蠶といひひとしく蠢爾として蠕ものにあれど、一は蝶となり花にたはふれさまようばかり、何ひとつこの世にのこしおくことなしさるに蠶と云へる虫のかたみればたゞ桑の葉の外世の中はなき如くなれど、はては絹といふめでたきものを作り出して人にめではやされめで度用をなす女子と云ふものも人のつまとなりてのちも遊山花見など浮きたることをのみ考ふべからす、勤儉に家を守りて、世の爲めになさんことをつとめ玉ふべし。華奢の戒めは卒都婆小町、勤儉の模範松下禪尼が行をゆめな忘れ玉ふべからす。とて事きれぬ。この老嫗は單へに女今川ほどのことより心得ざりし人なる可きに此れほどの言云ひ遺せしとはいと尊ふときことゞもならずや。

きよめぬ庭　其二十七

文盲　洒落齋主人

物學びするを云ふを、いと迂なるわざなりとて笑ふ者あり。此人思ふやう、凡そ物學びするは、愚なるものゝするわざぞかし、世に大事業を建つるものは、文字一つ讀得ず、文章片葉書き得ずとも事を成し、事成りたる曉には、物書者、文讀者どもを側に集ひ置かば、何少しの不自由あらむや。昔大閤秀吉の公、中國の戰半かばにして、主君織田信長の君の、本能寺に明智光秀の爲に弑され給ひしよしきゝて、敵の方に其實を明かし、一騎立にて京都迄還り來り、切りに軍兵をかり催しけるとき、側なる祐筆に仰せて、到著帳をなんつけさせける。時に一人の武者驅け來りて、我は醍醐村に其名知られたる、何某にて候と申す。祐筆之を記さんとするに、醍醐と云ふ字ひたと忘れたれば、筆をとりて考へつゝあり。秀吉公之を見給ひて、斯る急がはしきをり、何を考ふぞや、大小の大の字にても、かき記さんには足りと云ひしとな、其文字に暗かりしと推せらる。されども、天が下治むるとには、片手をも汗せざりし如く見るならずやとて、己れ太閤ほどの智力膽力あるが如くに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

思ひ、一丁字をも習はで、尋ふとき年月をすごし、終には文盲に終る者あり、實にいまはしきことゞもならずや。太閤は太閤となる可きほどの、天賦の文字あり、ことさら亂世の時とて學文よりは、智力、膽力の方、用多かりしをもて、關白太政大臣にはなりたれ。今の世の如く、人々學文を勉め、牛うつ童、小貝拾ふ少女に至るまで、口には君が代を唱ひ、手に大日本帝國と云はんほどの、文字は書き得るものを。社界の上流に立たんことを心ざす者、ゆめ學文を怠る可らず。

或る人、いたく雨の降りける日、友なる、こと〴〵く文盲なる人の家を訪ひける。此ほどは久しくおとづれず、されど御家にもかはりしことはなきや。など云ふ。主人立出つゝ。これはよくぞ來ませし、先上へあがられよ。と云ふ。立よりたる人。今日は土足にて候ほどに、又其うちにゆる〳〵參る可きに。とてまかりける。主人土足と云ふことを知らず、甚く腹をあん立ける。其家の子息これをみて。父上なにとてかくは腹立給ふぞ。と問ふ。主人。土足とは何事ぞ、なぜあれほどに云ふに、上へはあがらで歸りけるよ。といきまく。子息。土足とは泥つきし足と云ふことにて、雨の降りたれば、彼の人の泥足にてありしを以て、上へはあがらざりしなり。と云ふ。主人。土足と云ふこと覺えければ、何とかして之を用ゐてこゝろみんとて、土足にて、こゝろ易き醫師許訪ひけるに、醫師あいさつして。上へあがられよ。とすゝむ。主人。土足にて候。と答ふ。醫師。土足なれば裏の竹椽へ御まわりあれ。と云ふ。主人。竹椽と云ふことを知らざれば、此は人の名ならんと心得。はや今日はまかりて。又其うち參る可きに、何卒裏の竹椽樣へも、よきやうに御傳へ下されれ。と云ひしとぞ。

此者程遠からず、又々かの醫師許たづね來けり。今度は玄關より上に上りて、先きの日のあいさつども濟し、さて床の間をみるに、美事なる布袋の繪なん掛たりける。彼の人之をみて。あれは實に美事なる繪にて候が、かきては何人にて候か。と問ふ。醫師。筆者は藤顏の繪に、即之の讃にて候。と答ふ。彼の者、此は醫師ところの表具なれば、成ほど醫師くさき人々よと思ひて。偖々風眼の繪に、內障眼の讃にて候。かとぞ云ひし。

斯る人なりければ、ものかくわざ元より知らず、おかしき事共さわなり。彼の醫師先の日の返へしにとて、彼の者の家に至りければ、喜こび出迎ひつゝ、坐席に招じもてなしける。かゝるをり家の子息、帳面一づもて出つゝ、父の前に至り。こは先ほど仰の帳面の出來て候、何とかく可にや。と云ふ。父。材木の事

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

とかく可し。と云ふ。子息、筆をとりて。材とはいかに書き申すや。父。先木へんをかけ。子。木へんにて、つくりは。父つくりは假名でかけ、それほどの作用あきものが、末に至りて何と出世が出來やうぞ。とて、いたくしかり懲しける。後にて主人、一封の書狀を書し、醫師が前におきて。いとなめなることなれども、此表書して給はりかし。と云ふ。醫師、筆とりて。名當は何とかき申すや。と問ふ。主。新ノクとかゝれたしと云ふ。醫。新六とこそかくすべあれ、新ノクとは、ノクとはいかなる字にて候や。と云へば、主人いたくせきこみたる風情にて。貴老までがそれでは困ますあ、六日市のむいの字じやに。

色は匂へど散りぬるを　諸行無常
わが世たれぞ常ならむ　是生滅法
有爲のおく山今日越て　生滅滅巳
淺き夢みし醉ひもせず　寂滅爲樂

言行錄は大人君子の生る血なり（ミルトン）。

散る時の心安さよ米嚢花　越人
何事も無音のうちは靜かゝ之　去來
子や待んあまり雲雀の高揚　松風

毛詩曰烹魚煩則碎治民煩則散

子は草木よりも尊とし

山下石翁

ハーパート、スペンサー曰はく、麥を作る百姓、植木を養ふ庭作りすら、植物學の一と通りを知れり、草木生ひ立ちの理はり一つも知らで、之に着手せんとするほど不心得のものはあるまじ、然るに万物の靈たる人間を生み出し、之が貴重すべき一生を預からんとする男女の父母は、育兒の術に於て何たる學問及び經驗もなくして直ちに其重任に當らんとす、如此き徒らは、人の命ちを以て草木よりも輕きものと爲す乎と。實に味はひある言葉なりとす、赤兒呱々として泣き、天地間に生れ出でたるの瞬時、父母俄然として覺り、此のいたはしき玉の兒を扱ふに、抑も何如にすべきやと初めて案じ煩らふ、顧みれば身に左したる學問あく、たゞヲロ〳〵として思ひ屈し、兼て其心得を承知なし置かざりしとを歎くのみなり。醫者の言ふやう、赤兒の泣くは話しするが如きもの也と、左れど其話しするには、痛しと語る時もあるべく、又乳ほしいと語る時もあるべし、之を聞けど聞分るとかたく、たゞ茫然、淚ぐみて悲しみを覺ゆる耳。左れば、父はまたしもの事なり、苟くも母たらんほどのものは、預じめ學び置く所ろ深かく、大凡その事はとく覺悟してあるべき筈あり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

小公子

第三回（下）

若松しづ子

此時夫人は、セドリックを迎ひに行ふとして座を立ち、つれ歸る道すがら、セドリックが何か頻りに母と話をする聲が、聞へました。

かあさん、アノきん……きんさうリヤウマチだつて。大變なリヤウマチなんですよ、それから家賃が拂へないとなんか考へると、其きん……きんさうが尙わるくなるんだつて、ブリジェットが言ひましたよ。それから、パット（息子の名なるべし）も着物さへ有れば、小僧に行れるつてチィ、かあさん。

いふ聲聞へて、さて坐敷へ這入つた時の面は、大層に心配らしく、頻りにブリジェットを氣の毒がつて、ハ氏に向ひ、

かあさんが、あなたが僕を呼んで入つしやるつていひ升た。僕はアノブリジェットと話しをしてゐたんです。

ハ氏は暫しセデーを見詰めてゐましたが、少し度を失なつた氣味で、躊躇しながら、セデーの母が今も云つた通り、まだ〳〵何をいふも頑是ない子供であるとおもひ、

ドリンコート侯が……………

と云ひかけて、跡はお頼み申すといはぬ許りに、エロル夫人の方に知らず〳〵眼を放ちました。母は我子の側に急にすり寄り、さも可愛といはぬ許りに兩手でセデーを抱へ、

セデーや侯爵さまは、おまへのお祖父さまナノダヨ、おまへのとうさんのほんとうのおとつさまナノダヨ。其お方は、大層御深切で、おまへの樣な御自分のお子たちはみんななくなりなさつたもんだから、おまへを大變可愛く思召して、おまへがおぢいさんを敬愛する樣に、又それからおまへを樂しませ人を助けることも自由にさせて遣り度と思召て、御自分は大層お有福で、おまへの欲しい物は何でも遣り度とつて、ハヴィシャムさまにそう仰つて、おまへのに澤山お金をおよこしなすつたのだよ。今其お金をいくらかブリジェットに遣つても宜しいのだよ。アノ家賃を拂つたり、亭主に何もかも買つて遣られる丈。セデーや、好だろう、嬉しいだろう、好いおぢさまじやないか?。

と云つて、子供の丸〳〵した頬にキッスをしましたが、其頬は今おもひ掛なく聞ゐたとに仰天して、逆上せたと見へて、ポ

ット赤らんでゐました。母をチット見てゐた眼を、ハ氏の方へ外せ、いきなり、

今、頂戴な、僕、直ぐと遣つて來ても好いですか?、モウぢきに行つてしまい升もの。

ハ氏は件の金をセデーに渡し升たが、青色の新しい紙幣で、奇麗に揃へて捲いて有升たがセデーはそれを持つて坐敷を驅け出し升た。イキセキ臺處へ飛び込か飛込まぬに、聞へた聲は、

ブリジェットや、一寸お待ようサア、お金を遣るんだよ。お前のだから家賃も拂ふんだよ。僕のおぢいさんが僕に下すつたんだよ。おまへとマリイに遣れつて。

ブリジェットは仰天聲、

アレ、セデーさま、どふし升ベイ。廿五圓ジヤ御座りましねいか?、奥さま、マアどこにゐさつしやるだんベイ。

これを聞ゐてエロル夫人は坐を立ながら、

ドレ、私が一寸行つてよく譯を云て聞かせて參りませう。

跡には氏は獨り殘されて、窓ぎわへ立寄り、つくゞ思案貌、外を眺めてゐました。心の中に考がへて居つたは、今ごろドリンコート城中の壯麗を極めた書齋の中に、身は奢侈と華美とに圍まれてこそ居れ、痼疾に患み、心より愛敬するものとては一人もなき彼の淋しき老侯のとでした。人に敬愛されぬといふは、元と自分がこれ迄に誰れ一人人に愛を施したといふとがあい故で、誠に氣まゝで、傲慢で、性急な人物で有つたのでした。一生涯ドリンコート侯爵なる己と己の樂しみのと耳をおもふて、人の上を考へる遑なく、己の富も權勢も、己の高名、尊位に基く一切の利益も、皆お己が恣に用ゐて安逸と歡樂に供す可きものと斗り考へて居り升たが、さて歡樂と放蕩を極めた結局は、今の老人となつて、疾病に患み、癇僻はますゝ募り、世を忌み、世に忌まるゝものにあつたとでした。斯く斗り榮耀ある尊位を占ながら、ドリンコート侯爵ほど人望のあい、寂しさうな老人はあい位でした。固より招待狀を送つて城中喧きまでに來客を充滿させるとは、心のまゝで、立派な夜會や、盛な遊獵の宴を催ふすとも自由でした。然るに己れの招待に應ずる人々は、何れも心の中密かに己の餘り愛想好からぬ面相と、嘲弄、刺戟的の物いひとを忌み恐て居るてふとを承知して居り升た。老侯は殘忍な性質に酷薄なる物言を幷せ用ゐて、人が神經質だとか、高慢だとか、怯懦だとかいへば、好んで嘲笑して、不愉快にさせる僻が有り升た。ハ氏は老侯の無情、殘虐なる性質を見貫いて居り升

て、今しも狹隘な、静かな町を眺めながら、頻りに考がへて居つたとは、最前彼の大椅子に腰かけて、優に、無邪氣に、打開けて自分の友といふチックや林檎賣の話しをして居た、氣輕な、器量よしな童兒と老侯との大懸隔のとでした。それから深くポッケットの中へ突込んだフォントルロイ殿の少さなポチヤ〱した手に追つけ握らる可き莫大な歳入や、美麗、壯嚴なる産業や、善にも惡にも用ゐらる可き權力のとを思ふて、獨り言に（イヤ大した變動だろう、大した變動になるに違ない）と申て居り升た。セドリックと其母は間もなく座へ戻り升た。セドリックは大勢でした。ハ氏と母との間の自分の椅子へ腰かけて、膝の上へ手を乘せて妙な位置になり、ブリヴェットを助けて悦こばせたといふ嬉しさを、滿面に溢れさせてこふいひ升た。

マア、泣いてましたよ！、そうして嬉しくつて泣くんだつて云ひましたよ。僕は嬉しくつて泣く人始めて見升たよ。僕の祖父さんは大變な好い人なんですよ、僕はそんなに好い人だつて知らなかつたんです。それから子、侯爵になるのはアノ……僕が思つたよりはよつぽど好もんです子イ。僕は侯爵になるの……アノ隨分……大變嬉しくなつて來ましたよ。

寄書

○眞正の改革家

川合信水

明治の社會に於ては、男子となく、婦人となく、悉く改革家の精神を持たざるべからずとは、是れ余輩が平生の持論なり、余輩富士山麓の一青年、交際頗る狹しと雖も、知る所の兄弟姉妹又少なきにあらず、彼等は健氣にも、改革家を以て任じ、改革の事業をなさんとせり、改革固より必要なり、急務なり、何人か不贊成を唱ふべき、然らば何如に、彼等は世を感ぜしめたる乎、世を動したる乎、否々世は未だ感ぜざるなり、未だ動かざるなり。

「ほとゝぎす血に啼く聲は有明の月より外に聽く人ぞなき」彼等は實に此境に沈めり、而して彼等は更に憂へざるなり、大膽と云はん乎、天命に安んずと云はん乎、余輩之を知らずと雖も、彼等の言ふ所は頗る支那學者の風あり、曰く吾等は世より高きものなり、世は吾より低きなり、吾の世に容れられざるは、世の吾より低きが故なり、是れ豈怪むに足らんやと、其顏色、舉動、昂然として雲を凌ぐか如し。

嗚呼何事ぞ我兄弟姉妹の冷惰なる、斯の如きの情、一進し、再進し、三進し、遂に屈原となるに至るべし、若し然らざるものは退て而して放逸なる者とならん、進まず退かざるものは、一種の冷笑者として了らんのみ。

余輩は思ふ、苟くも改革の理想を持ち、改革の事業をなさんとする者は、非常に剛かるべしと雖も、亦非常に柔かならざるべからず、上りて世より離るべしと雖も、亦下りて世と附かざるべからず、其大膽なる、勇猛なる、以て百万の虎狼と戰ふべく、以て死生の間に談笑すべしと雖も、其優しく、愛に富める、稚き小兒の爲めに、弱き姉妹の爲めに、小さき家の爲めに、心より湧き出る涙を濺ぐ、是れ之れを眞正の改革家と云ふ、斯の如きの改革家は、今ま日本に必要なり、男子にして多く其人ある乎、婦人にして多く其人ある乎、余輩は實に其多くあらんとを望む。

故に余輩は我愛する兄弟姉妹に向て、斯の如き改革家の資格を養成せんとを勸む、然らば則ち如何にして養成すべき乎、兄弟よ、姉妹よ、余輩は敢て告白す、爾等

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は敢て遠くを望むに及ばず、廣く見るに及ばず、近く爾等の机上に安置するの聖書を觀よ、深く觀よ、爾等は實に完全なる、完美なる唯一の手本――活ける基督――を見出さん、然り、吾人は實に基督を學ばざるべからず、其大膽なる、大勇なる、誰か基督の如きものあらんや、一言の下にサタン退き、一語の斥に逆浪靜まれり、エルサレムの宮に、牛羊及び、そを賣買する者を逐出し、其金を散し、其案、其椅子を倒し給へる時、橄欖山に、自らを捕へんとして來りし兵卒下吏に向ひ、從容として――爾曹誰を尋ぬる乎――と問ひ給ひ、彼等が――ナザレのイエスなり――と答ふるを聽きて――我はそれなり――と曰ひ給ひしに、彼等却て地に倒れたる時、祭司の長の庭に下吏に面を打たれし時曰ひ給ひたる言葉、吾人は其勇、古來の總ての英雄の勇を合せしよりも、遙かに大なるを想見するなり、而して其愛の至れる、其謙讓の極まれる、誰か基督の如きものあらんや、預言者を殺し、遣はさるゝものを石にて打つのエルサレムを望んでは歎き給ひ、貧しく小さきラザロの爲めには涕を流し給ふ、手づから弟子の足を洗ひ給ひ、自らを十字架の上に殺すもの〻爲め に祈 し給ふ、吾人は眞に何の言葉を以て之を讃美すべきやを知らざるなり。

顧て吾人々類を見れば、誠に弱小なるものなり、而して少しの勇あり、少しの人より勝るあれば、動もすれば輙ち傲慢に流れんとす、余輩東都に遊んで、所謂改革家と稱するの兄弟姉妹に面す、中には或は傲慢なる、冷情なる人もあるやに思ふ、顧みて日々机邊に親しむの聖書に對して、其人の爲めに顧る悲しみ、願る惜まざるを得ざるなり、余輩も亦一時は古英雄の豪膽不屈を慕ひたるものなり、其人を見ると遣ふ蟲とも思はざるを喜びたるものなり、然れども今は發明せり、今は悔て基督に從へり、夫れ古來の英雄――基督に由らざるの英雄にして、其雄圖鴻略てうもの、身後までも傳はりしものある乎、アレキサンデルを見よ、シーザルを見よ、ナポレオンを見よ、ジンギスカンを見よ、秦始皇を見よ、豐太閤を見よ、英雄の末路既に憐むべし、英雄の身後猶更憐むべきを見る、思へば余輩は彼等の爲めに酸鼻の至りに堪へざるなり、蓋し彼等は自らを頼み、臣下を頼みたるのみにて、神を頼むとなかりし故に失敗せるなり、基督を見よ、在世三年の傳道、世人が見て、愚なり、迂濶なりと思ふが如く、卑しき小さき人に種を蒔き、而して其種發生し、長育し、如何なる暴風猛雨にも、屈せず、撓まず、益々繁り、益々榮へ、今は其高さ雲外を突き、其蔭全世界を蔽はんとす、豈盛ならずや、余輩は信ず、基督は其父なる神を愛し、其子なる人を――敵までも――愛し給ひしが故に、世に勝てり、永遠に勝てりと、愛の向ふ所は天下に敵なし、吾人若し之を知らば、何ぞ一日も早く基督に由らざるべけんや。

余輩は固に基督に由るべしと云ふ、余輩が之に由るべしと云ふは、其口にて之を信ずと云ふに止まらず、心にて之を知りたると思ふに止まらず、其信ずる所、思ふ所を實行すべきを云ふなり、主よ〳〵と曰ふに止まらずして、能く其旨に遵ふとを云ふなり、砂上に家を建るの愚者となるにあらずして、磐上に家を建る智人となるとを云ふなり。

我兄弟よ、我姉妹よ、願くは之を記臆せよ、吾人は罪惡を退くべしと雖も、併せて罪惡に魅せられたる人を退くべからず、彼れと雖も、亦神の愛し給ふ子なり、此神の經營し給ふ天地に於て、彼れ豈其罪惡によりて立つを得んや、彼れの立つは其中にある幾分かの眞善に由るなり、然らば吾人は世の一種の道德家の如く、無情にも彼を見棄て、勝手に亡びば亡びよと云ふが如きの擧動をなすべからず、余輩が世に處し、人に對するの方法は、甚だ簡單なり、曰く生ずと殺すと是れのみ、生かすとは何ぞや、人の善を生すとなり、殺すとは何ぞや、人の惡を殺すとなり、而して此生殺の權を握るに愛を以てせんとす、純粹、潔白、廣大、美麗なる基督の愛を以てせんとす、余輩は及ばずと雖も、能はずと雖も、斯の如くなさんとを心懸け居るなり、愛なき者は人を感ぜしむる能はず、人を動かす能はず、彼の傲慢なる冷情なる者、能く何をか成さんや。

思ふに余輩が口吻倘頗る幼稚なり、然れども其云ふ所は皆其信ずる所に外ならず、世の改革家、及び改革家たらんと欲する者、若し之に對して一顧を賜はゞ幸甚し。

○帝國議會代議士を汚辱せるの所爲にあらずや

佐賀市中町　今井謙造

廢娼論も馬耳東風と澄し込たる佐賀市のとなれば別段怪しむにも足らざれども去十月五日縣下選出の代議士松田正久武富時敏二位景暢天野爲之四氏の上京を送る爲め佐賀市協和館に送別會を開きたり余も佐賀靑年會員とし出席せしに式了て启ち宴を開くに方り奇怪不思議の婦人三三五五偶々あるを見たりしが酒酣なるに及んで突然として現はれ出で三絃を弄し可憐可厭俚歌を唱出せしは何事ぞ余は於是席を起て退出したりしが堂々たる帝國議會代議士を送るの會に穢多奴隷に均しき藝妓を聘し酒を侑めしは幹事發起人の不注意と云ふべし是れ幹事發起人は帝國議會代議士を汚辱したるの罪免かるべからず天下の義人鼓を鳴らして之を攻めて可なり

●正誤　前號時事第三項、「勅撰屢ば替はる乎」の一項事實無根の由、報知新聞にて取消せしゆへ隨て取消す、幸福なる取消なり。又板垣伯廢娼論の項中小島氏よりは石島氏、廢娼論者の姦策は非廢娼論者の姦策の誤也。

交詢

みれ子

●一書生　に申します、簿記學では森島修太郎氏著（簿記學例題）價卅錢、竹田等氏譯（簿記學原論）價三拾錢圖師民嘉氏抄譯（簿記法原理）價五十六錢、竹田等氏輯（商用簿記）價一圓、等が宜しひものでしよふ、是等は皆丸善書肆にあるものです、尙精しく取調ぶれば多くありましようが聞き得た丈けを御知らせ申ます。○豐國學校の事は私は存じません、亦聞き得て御知らす申す事と致しましよふ。

●於無劣生　當地にて西洋料理を敎ふる所とて別に存じません、而し近頃家政學が流行しますから其内に西洋料理の事も一通りは敎へてありましよふ、夫れ故家政學を敎ふ所に行けば分ります、之は今では女學校の一科として敎ふる外之が爲めに專門の學校とてありますまい、女學生なれば無論女學校にて學ふ事ができます。

●安中任俉生　嘗てハワイに領事たられし安藤太郎氏の住所は府下麻布區本村町廿二番地です、其他の人にてはハワイの事をよく知る御方は少しも存じません。政治學と經濟書の事は丸善書肆の書目に付は御一覽を願ひます

●速記學　京都にて無遠慮生氏、速記を學ふ書は吉永良延氏著にて一ヶ月卒業速記の秘術（價四拾錢）上田慶三郎氏著にて速記學通信錄（價廿五錢）抔云ふ書があります、是等は丸善にて賣捌くとの事です、尙他にも多く速記に關する書物があります、林茂淳氏のが最良と存じます。

●牛乳と食物　訥朴生殿、食物に色々ありますが其内にある滋養分の種類は多少異るのです、例へば、魚の如きは蛋質を含む故身体の内の骨を養ひ、米は澱粉質が多くして肉を肥やすといふ樣なものです、それ故米から得る滋養分を魚から得られません、魚から得る滋養分は牛乳から得られません、其滋養分といふのは食物が異れば全く異るとも限らず或食物は他の食物と似たる滋養を含蓄する事がありま す、而し全く他の飲食を廢して夫れだけの滋養分を牛乳より得る事はできません、病氣の爲め一時は牛乳だけにて支へる事もできますが到底久しくは支へられません。

●離婚、再婚、　近頃歐米諸國にても頻りに討議論辨のある離婚及び再婚の事は實に大問題ですから容易には決せられません、迷疑生と名を匿さるゝ御方よ、迷ふのも無理はありません、信基眞督敎信者にして一度嫁したりし不信者を娶りて宜きか、信者にして一度妻ありし不信者の夫に嫁して宜しきやとの二問、私の思ふ所によれば其先きの妻君若くは夫と別れし事情を明らかにするのが大切です、若死にて別れしとか亦は今嫁せんとする人の方に不義の行ありしに非ず、先きに離婚せられし人の方に不義の事がありしといふが如き場合に於ては無論再婚しても宜しひと思ひます、尙申上度思ひますが、長くなりますから止めます、近頃本誌に離婚問題につき諸家の異見を揭載してある故幸に就て御讀み下さい。

時事

○女敎師、學務委員

女敎員を市町村の學務委員中に加へざるは何の理由ぞ、頗ぶる奇怪也。或人の解釋に夫は市町村制に女子に公民權を與へざるゆへなりと云へり。然れども、學務委員中に敎員を加ふるは市町村自治の制度の上より起る要則にあらず、寧しろ、自治制に則とり、其他の人々自から學務委員となるの間だに、敎育學上顧問の資格を以て敎員を加入するの主旨なるを、法文前后の意義により十分に明知せる。然らば市町村に公民權あると無きとは此一事に毫も關係なし、若し關係を有すとせば、此の加入すべき男敎員が公民權を有するや否や、又其の勤務せる市町村の中にて公民權を有するや否やを限定せずんばある可らず、然るに小學校令には一も如此き限定を置かず、知るべし、委員中に敎員を加ふるは、敎育學上の必要にして、自治制の上の必要にあらざるを。

果して敎育學上の必要よりすと云はゞ、何故に女敎員を加入するを制止する乎。政府すでに女敎育を置くを認可し、又自から女敎員を養成しつゝあり、而して彼輩は敎育學上及監理術上に何の才能もなきかの如く、如此く明白に其權利を奪ひ去らるゝと何の理由あるによる乎、一方には女敎員を養成し一方には女敎員を殺しつゝあり、之れ政府の仁と云ふべき乎。

よし實際には男敎員が委員となる方益多しとせよ、益多からば人即はち男敎員を擇取すべし、何も初より女敎員を撰外に拒絕するに及ばず。政府近來の法例寧しろ不必要の拒絕を制定し、以て大に人權を損するとなからんやを疑ふ。

然るに敎育學上、ことに小學の敎育術上女子は決して男子に劣るものにあらず、故の文部大臣森君の如きは、熱心此說を主張し、小學校の敎員には成べく女子のみを用ひんとしたり、小學校女敎員の有効至適なるは天下殆んど公論あり、左るを今ま忽まち女敎員一切を退け、悉とく皆學務委員中に加入す可らずと限定す、何等の理由ぞ。

英米にて女性に、議員となるの權を與へざる所ろ尙多し、然れども學務委員を撰擧し、若くは其委員となるを明らかに拒むの國至つて少し、而してロンドンの如き、米の諸州郡の如き、實際女性を學務委員に用ゐたるが爲に非常の効能を奏し、現に或る失敗せる學校の如きは、其失敗の一大元因を女委員を用ゐざるとに歸しつるほど也。日本未だ斯迄に進まずと云はゞ尙可也。然れども到底進むべく、亦進めざる可からず、然るに今卒然頭上より一大制限を落下し、一切の女子一切學務委員となる可らずと云ふは、抑そも何の理由ぞ。もし故文部大臣を九泉の下より呼び來らば彼は吾人と共に熱心に此の理由を聞かんとし、寧しろ滿庭の起草委員を叱咤するなるべし。惜らくは森君なし、あゝ森君なし。

○馬鹿らしきは斯迄に候

女人禁制の評議區々なりとて、毎日新聞は云く、
衆議院議院規則按第百六十五條に「婦人は傍聽を許さず」とあり是よりして左の如き區々の評議を生じたりと云ふ甲曰く此規則按が婦人の傍聽を許さゞるは故なきにあらず往時婦人は社會より擯斥せられ現に兩國本場相撲の如きも櫓太鼓の聲は男子を招くも婦人を招かざりしに今は回向院本場木戸口は柳橋金春を問はず裏巻の私窩子迄大手を振りて往來するは古物保存の本旨に違へり國會議場は相撲の本場にあらざるも會議の本場なり回向院の本場には女人禁制の古道廢頽したれば我が當局者は國會議場に此古道を存したるなりと乙曰く是は佛教の教義より出でたるなり經に曰く外面如菩薩内心如夜叉と又曰く大蛇を見るとも女人を見る勿れと空海傳教の諸大師が高野山比叡山に女人禁制の札を立てしも之れあるが爲めなり而るに女人禁制の制札廢せらるゝや否や婦人共は高野山女人堂の内に遠慮なく放尿する者あり名山靈地の神聖は何れの所にある幸に二十三年は國會開け其堂内は神聖なる場所なれば當局者責めては此所に神聖の靈地を止んと第百六十五條を設けたるなり丙曰くソレでは丸るで議事堂を以て寺院と同視し三百の代議士を以て和尚上人善知識行者様となし議案を以て御經と同視するは姑く善しとするも第一不都合なるは正面に如來様のなき一事なり日本如何に佛教國なりと云ふも議院と寺院とは別物なり當局者が此一ヶ條を設きしは日本の集會結社法は婦人に傍聽を禁ずるの一條あり之と釣合の爲めに此條を設けたるなり往時佛國に女人禁制の議事規則ありしとは過日毎日新聞に載せたる例もあり此等の理由の爲めに女人禁制の制札ではなく女人禁制の條を設けたるなりと議論紛々たりしはツイ兩三日前某宴席にてのとなりしと
又報知新聞は、婦人の國會傍聽大に面白しと題して云く、
婦人の傍聽を許す許さぬと云ふが如きは詰り何れにても可なれども政社法に抵觸すると云ふ說は政談と議會の議事とを區別せざる說なりなど種々の言出つる折柄一議員は大聲を發して曰く素より大に婦人の傍聽を許さゝるべからず殊とに余は彼の謂はゆる藝妓なるものなど最も多く來らんとを望む其の次第は一体の日本人を看わたすに虎鬚逆さに竪ち今にも腕力に訴へんとするが如き勢ひの武骨男子もソコに二三の婦人加はりてやさしき言葉をかければ菁菜に鹽の如きが多し彼の芝居などの如く今日は柳橋總傍聽明日は新橋の惣傍聽と云ふ有様ならば議場は毎日誠に平穩ならん一人啄を容れて曰くマサカに藝妓を紹介して傍聽せしむる程の勇氣ある議員もなからん前者更に辨して曰く他に紹介者なくば余進んで之が招介者たらん彼の赤羽織の坊主などが日々來たりて議員と藝妓との間にヒヨコ〳〵するなどは隨分奇觀なるべし其内に贔負議員人氣議員と云ふものも出來て何番議員さんへ芳町何吉よりなど云へるヒラ引幕など出つるも亦た英雄の名譽と云はざるべからず。

皆何れも本氣の沙汰に非ず、眞個に民權の伸びざるとを憂ひとするもの果して何處にありや、云く自由滔々々々と、自由とは抑そも何如なるものぞ。

○帝室技藝員

宮内省は、大日本の美術を海外に顯揚し且つ彌よ工藝技術を練磨して后進を誘導せしめんとの目的にて、兼て十余名の選擇委員を置き、精選審査の末、左の十氏を舉て帝室技藝員となせり、
畫工　森寬齋。守住貫魚。橋本雅邦。狩野永悳。田崎草雲。彫工　高村幸吉。石川光明。金工　加納夏雄。漆工　柴田是眞。織工　伊達彌助。
右十氏には、年金を給し又優待の道を賜はる由。御保護中にては香き御保護と恭やしく祝す。

○小學校令

漸やく發布になり、少し自由になりたり。然し自治制の下にては之れ程の事なかる可らず。但だ文部大臣之を規定すとある所ろ、實際の手際を見ざれば分らぬ事至つて多し。授業時間の數其他を大臣規定せんとするに至つては、能く〳〵其地方々々の情狀を考慮せらるゝと肝要なるべし。

○婦人矯風會

去十一日芝能樂堂に催ふしたる、同會發起の慈善能樂は、初め巖本が同會の主旨及綱神を演述し、后ち龍田の噺子末廣狩の狂言ありて、次に寶生九郎尾上新次郎氏以下の船辨慶の能あり、來觀するもの洋人二十余名邦人三百余名にて頗ぶる盛會なりき。決算の報告は次號に向け寄送せらるべしとなり。

○若松女學校

誰か、「王師に抗したれば也」との一句を以て、若松落城當日の慘澹を抹殺し得るものぞ。吾人其かみの情狀を追想して、悲憤する所ろ、慷慨する所ろ、哀泣する所ろ、惻然として痛む所ろ、極めて多し。吾人必らずしも悉とく東海散士の筆に服すと云はず、然れども激して彼「佳人之奇遇」を歌ひ出でしめたる無涯無限の感慨に對しては、頗ぶる、同情を有す。今ま、海老名りん女史、乘正綫氏、等若松に私立女學校を創立せんとを發起し、其第一着手として先づ女文會なるものを起し、假に英和學を教授すると云ひ、西京同志社女學校の卒業生三輪永女史教員としてすでに招聘せられきと聞く、吾人が彼地の女學校に贊成するは尋常ならで、願はくは壁に書して自双したる當日の女武魂、文明の學に一磨を添むつて新日本貞烈の佳人を化成し、東北の野より第二世の女丈夫奮々として起り立んとを熱望す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

芝亭忠賢氏の平民新聞、島尾得菴氏の中正日報、坂垣退助氏の自由新聞、立憲自由黨諸氏の江湖新聞、寸前尺後の相違なも續々發生し來る。時は草萌へ出る春にはあらで、木の葉散る秋の初めなり。嚴寒は遠からずして來る。

○新聞、最新聞

○なるへし

未だ眞政黨の時代にあらざりし也、故に從來の行掛を解散せしなるべし。成べく情實の歴史を作りたくなし、故に此迄の經歴を一洗したるなるべし。兎に角經め置くを好しとす、何れにか爲るべし。暫らく辛捧せよ、どうにかなるべし。別に反對にあらず、然し逆もつゞくものにあらぬなるべし。つゞく迄は這入り置くべし、故障あらぬなるべし。左樣に思ひしとはイスカの嘴とかはる、物事は皆なかゝるものなるべし。之にて一層行掛りが殖え、歴史が入組たり、何の役に立ざりしなるべし。追々と政黨が別に出來、新聞が別に出來、遂に破裂するあるべし。暫し默すべきか、一つ騷ぐべきか、別に働らくべきか、其邊が考へ物なるべし。

○多妻宗、教甚を變へんとす　米國かなる

米國ユタ洲サルトレーキは同宗の本陣なるが同處に於て開祖の六十回期大會を催せし時國中各所の諸教會より代議員して集會せる者凡五千人…其時宗長と仰がるゝウードラッフ氏は開會の演説中に吾宗の信ずる天啓の期日最早既に終を告げぬと公白し、且曰く、神は救濟を渇望する人民の爲には已に十二分の奇跡を顯示し玉ひたれば、最早其上に望むべき必要を見ずと。之を詳解すれば、該モルモン宗の陣幕中に備へあるボンプ、シエール（鉄ニテ造リタル鳴動器）に依り、預言者と仰がるゝウードラッフ氏之を再傳する者と皆信仰し來りしが、今度頓に廢止せんとするにありと。之に附ては他の輔者達も交る〳〵立ちて其説に同意を表し、且同教會の法規を修正せんとを贊成せる由。同宗風指の信者の談話に、今度ウードラッフ氏は此大會の事を告げざる前に、必ず多妻主義の廢滅を、皇天の默示を受けて普く世に證明さるゝならんと風聞せりと、哀哉。

○日曜日休むべきの議　貝瀞子

近來佛國に於て大ひに日曜日休むべきの議盛に行はる、過般リモーズに開きたる學士會に於ては多數の者其休むべき議に贊成を表せり、日曜日に休むなくば勞働社會は野蠻人の如くなり、遂に生存競爭に敗を取るべし云々と主張せしもの多かりしとぞ、鐵道會社に於て　日曜毎に緩行列車を發する事と定め、亦九月後は日曜毎に夕滊車を廢する都合なりといふ、當時佛國のパリス及びリヲンの鐵道會社々長は日曜休暇會の會員なるが故に甚だ都合宜しといふ。英國に於ては是に反し、休暇の事を敢て意にせざるの傾向あり、歐洲大陸に於ては佛國の如く盛に休むべき議起るにも關はらず、英國人は未だ此日を堅く守るべきを知らず、是只に貧民に限らず、高貴の人尙然り、日曜日は快樂を貪る日となす、高貴の或は遊山に遠行し、或は宴會を張り、音樂會をなし、踏舞會をなし、日曜日に休まざるも亦道理に非ずや。社會にして斯の如し、細民貧者が日曜日は靜肅に保つべきものあり、或は一室に集つて上帝に熱禱する人もあらん、或は會堂に立ちて道を說く人もあらん其他數の爲めに働くもの多し、是等の人は皆靜肅の時に非ずんば其働きをなして好結果を得せしむる能はず、今日に於て逃く日曜休暇の議を起し、道を說き數を得ふ者の便利を計るは最も切要の事とす。イーストボルン市に於て「ツオール、クライ」と號する新聞の如きは公然日曜日に販賣す、市會議員にして痛く之を慨き、其販賣を禁ずべき事を主張せしものあり、ゼ子ラルブース之を聞き、少しく之に注意せしが如し、遂に其販賣を止むる樣戒せられん事を切望すと、是英國基督教新聞の痛嘆せる所なり。

○囚徒及幼者保護

白耳義アンヴエール府に開かる、九月九日より監獄に關する万國會議、議案左の如し。

第一部　幼者の保護

第一　種々の原因に由り政府の保護を要する幼者の體育、智育、德育の發達を確實ならしむる方法は如何なるものを以て最も可とするや
　本題幼者の重なる種類は左の如し
　犯罪幼者即ち法律上重罪或は輕罪と稱する所の行爲を爲したる者
　無籍幼者
　依るべき所なき幼者

第二　親族に依託する方法は幼者のために利益ありや否
　利益ありとすれば其方法組織如何

第三　如何なる場合を以て父たるの權利を放棄したるものと認むるや
　其放棄したる場合には如何なる方法を以て幼者を保護すべきや

第四　父の望に依り入監せしむる幼者には如何なる規則を適用すべきや

第二部　囚徒及滿期放免者の保護

第一　囚徒及滿期放免者を保護するには如何なる方法を最も適當とするや

第二　臨時救育所の設定は必要なりや
　必要ありとせば其組織方法如何

第三　警察官の特別監視と保護事業とは調和し得るものありや
　警察官の監視に代ふるは他の監視法を以てするを得るや果して然らば其方法如何
　警察官の監視を維持するとせば其組織如何

第三部　食丐及漂泊人

第一　食丐及漂泊人を豫防する方法如何

第二　右の豫防法に關し救育所と保護委員との間に定むべき關係如何

海外通信

在米國通信員　稻澤かさる

○ブラバスキー女史　英國神宣教司祭女(Theorophist)マダム、ブラバスキー婦人は只茄子、菓實、干葡萄及ひ水液多き菓物を食し且熱湯を飲料とするの外何物をも飲食せざれども体量は三百パウンドありと。婦人は恒に黑染絹の外套を着し、稚兒の如き風裝をなし紐にて腰に帶し、ロンドン府の本宅に在りて室より室へ移轉ざるゝ時は晝夜とも坐數車に乘りて居らるゝよし。

○葡萄女豪傑　ポルチユガル、リスボン府に於て現時の豪傑は獨逸產の美婦人なるフローライン、ヨハンナ、メーストリツヒ婦人にして今度野牛戰鬪者として世間へ最初の緋出しを致さるゝ由。

○幼稚園大會　ミセス、ウイギン夫人は去る頃英國ロンドン府に開かれし幼稚園の(Kindergarten)總集會に臨みて會長の椅子を占めらたり右の會場は時の有名老練なる教育家を以て充滿し、且尤も盛大にして有益なりき、臨席のマダム、ミッチエリース婦人、ミス、フランシス孃、ミス、エミリー、ロード孃ミス、エミリー、シエソーフ孃及ひ他の方々の勸迎辭幷にカリホルニヤ洲に於て育幼事業上の成績を賞發されし演說等に一々答辭を述くられし由。

○ロシヤの婦人　ロシヤに於て婦人社界の進歩は日を追ふて愈〻迅速を加へり或一人の婦人某はニアゼツフの郵便局長に撰はれ又或婦人は電信局の書記或は又ツラスカスピアンの鐵道會社の代理者となれるもの數多あり。

○女后ナタリー　御自身の離緣に就きて載せある諸新誌を取揃へて之をロシヤの法律家某の元に送り遣し玉ひ尙女后は御婚姻在らせられし以來の事實に歷史を編みて一冊子とし之を世に公にせん思召の由。

○婦人衞生會　今度米國ニユーヨーク府の有志婦人方は(Health Protective Society.)(衞生豫防會?)なるものを組織されしが右は一已人の爲のみに止まらずして市街の辻々に至る迄限なく同會の目的を實施せん爲に新たに委員を撰みて歐洲諸國に遣はせり向ふ三ヶ月間の費用は同會より之を辨ずる筈なり右の委員は歐洲諸府の街衢の掃除法を觀察し且つ英國ロントン府の如き其整理せる處に於ては特更に精細に調査すべき筈なりと。

○イサベラ后とコロムバス　來る千八百九十二年シカゴ府に開かるゝ萬國大博覽會々場內に設立さるゝ女后イサベラ協會の目的は此時に際し婦人の事業を顯表せんが爲め之を執行するに主も兩個の主點あり

第一には　當アメリカの大發見者コロンバスが目的を達せしめんが爲其費用として貴重なる寶玉を下賜し玉ひしスペインの女后イサベラの玉像を建立する事、

第二には　イサベラ館と稱へて婦人クラツブ會館を建設するにあり、

右の女后の彫像はアメリカ第一の彫像家たるハリエツト、ホスマア孃の擔任なる由。

○亞米利加の人民院　ニユーヨーク府の豪富コルヂリアス、バンダビルト氏は同氏の母君と共に謀りて同府內第三街と第四十二街の間にピープルス、パレース(People's Palace)なる「貧民歡樂宮」と云ふべき者を建設の計畫中なる由尤も英都ロンドン府には既に同名を以て建設しあれば右の企も全く同建築に倣はるゝ者なる由其費目の概算は凡二十五万弗なりと、而して該館內には技藝、工業的の教育部幷に傳道學校を設置し且つ其上に衣、食、起臥の便を備へ、運動場、讀書館等をも設置する筈なりと此美擧にして愈々實行さるゝに於ては同家の親戚の諸友方も大に贊助さるゝ處あるべしと。

○アメリカ富有婦人　を擧れば先第一にニユーヨーク府のミセス、ヘツチイ、グリーン夫人にして四千万弗を有せらる、次にはミス、エリザベス、ガレツト孃にして二千万弗を所有さる、次はミセス、テレー夫人にて同二千万弗を有せらる、次はミセス、マーク、ホプキンス夫人にて之も同しく二千万弗を所有さる次はミセスエドウイン、ステーブンス夫人にて一千五百万弗を所有され、次にミセス、ジヨン、ゲリーン夫人にして一千万弗、次はシカゴ府のミセス、サイラス、マツコミツク夫人にて一千万弗、次はミセス、ジヨン、ジヤコブ、アストル夫人にて八百万弗を有し、次はヒラデルヒヤ府のミセス、ジヨン、レー、パルトン夫人にして七百万弗を所有され、次に鐵道會社々長の未亡人にてミセス、トーマス、エー、スコツト夫人にして五百万弗を有せらる、次はシカゴ府のミセス、ウイリアム、アモア夫人にてサイラス、コツプ氏の愛娘なるが五百万弗を所有さる、次にミセス、ジヨセフ、ハリソン夫人、ミセス、ジ、ヨセヒン、アイヤア夫人、ミセス、ジエン、ブラウン夫人、ミセス、ダブルユー井、ドツジ夫人、及ヒヒラデルヒヤ府のフランシス、エ、ドレツクセル氏の令孃方にして各四百万弗の財產を所有せらる、又ミセス、ロバート、ゴーレツト夫人、ミセス、ゼエーヤア夫人は各三百万弗を所有せられ尙其外にミセス、テレース夫人の稚兒にして尙三歲未滿なるが五千万弗の財產を讓受らるゝ筈なり。

○世界美婦人集　メイフリスの男爵夫人クララ、ダル、デツクラー夫人此頃世界中の美婦人の元へ迴文を送りて撮影を求めらるゝ由其は全く其內の勝れたる者を撰みて「第十九世紀過中の美人の影像」と題せる帖中に挿まんとの企圖の由に承り侍へる。

內國通信

●長濱

●小學アルムニ會　長濱小學と其卒業生との間には幾分の關係を存し時々相會して親睦談論を催する事あり近頃は女子の卒業生をも續々出して之と共に相會すとか難しきことゞもなりこれを小學アルムニ會とも申すべきか願くは其實益あらんことを。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●教師と女學雜誌　小學教師中相計て幾多の雜誌を購讀せるに或一二の人の望により女學雜誌をも購讀することゝなりしに該雜誌は端なくも多くの教師の攻擊する所となりて雜誌欄外は罵詈誹謗の言を以て充さるといふ人は該雜誌の純潔高尙にして日本女子の伴侶たることを許せしに何を以て茲に致たる乎といふに其主義とする所不可なる爲めなりとぞ通信者は其熊海のせまくして眼界の小なるに驚くなり亦以て女子教育の方針如何を卜すべし。

●南片町　に行く南片町に遊ぶとは常地に於て屢聞く所なりしが計らざりきこれなん遊冶郎の口吻にして貸席の孕する所ならんとは近頃或紳に就て調査せしに該町に於る貸席數十五戶にして一年の賦金六百五十四圓藝妓二十四人にして稅金千百二十圓娼妓五十二人にして賦金千七百十五圓なりといふこれ最近の調なり。

宮庭錄事

●御救恤恩賜金　天皇　皇后の兩陛下は先般埼玉福嶋兩縣下非常の水害に付罹災人民の困難の趣き憫然に思召され　天皇陛下より各金七百圓　皇后陛下より各金三百圓下賜相成りたるにより目下救恤の補助に充つべき旨を本月十日兩縣下へ達せられたり

片々

可愛子編

●帝室財產に入るべし　富岡製絲場は一時、公賣に附せんとまでの內議もありしが畏き御邊りの御內意もあり殊に皇后陛下には常に養蠶に御心を傾けさせらるゝを一方ならざれば帝室財產に編入し我國製絲事業の摸範工場たるを後世に傳へんとの議に內決し東園侍從は命を奉じて同地へ出張し其摸樣等を取調べたりと。

●アンザロップ嬢世界一週　橫濱貿易新聞より世界一週の使者として發遣せる封倘女史即はちアンザロップ嬢此頃歸朝し、去十一日の同紙上より其世界一週の旅行日記を揭げ初めたり。

●淸水數子四京行　吾社の同女史は頓かに四京に趣く一週にて歸社し彼地の景况を報道すべし。

●女子部を設く　神田猿樂町十五番地國語傳習所にては本月十二日より新に女子部を設け女子に必要なる作文詠歌等を每日曜日に敎授す。

●女子師範生の募集　東京女子師範學校にては此度生徒二十五名を募集す有志者は本月卅一日までに東京府廳に願書差出すべしとのとあり試驗科目は師範學校第二年生だけの學力を有する者ならでは不可なり。

●慈惠醫院幹事　近衛公爵夫人蜂須賀侯爵夫人前田公爵夫人後藤伯爵夫人小笠原伯爵夫人青木子爵夫人陸奥從二位夫人山尾子爵夫人井上男爵夫人三宮從四位夫人の十名は本月六日　皇后陛下より來る明治廿四年度東京慈惠醫院幹事を仰付られたり。

●婦人慈善會　來る十一月十三日より十四十五日都合三日間鹿鳴館に於て開設する婦人慈善會は東京慈惠院に寄附する慈善の本旨にて同院幹事の周旋に成るものなり各區受持の夫人は第一區に山縣伯爵夫人樺山山尾兩子爵夫人出席し其他の區は總て三人茶店は五人宛連日出席す此際從來の貴婦人令孃は助手として周旋す。

●婦人傍聽禁制に關して　兩院規則案には最初兩議院に於て起草したる原案には婦人の傍聽禁制の箇條なかりしも內閣法制局に於て書き加へられたるやに風說するものあり事實如何にや。

●盲啞院の慈善音曲會　京都市立盲啞院にては同院の資本金を得るの目的を以て來月上旬慈善音曲會を催ふし同時に盲啞生の製品を院內に陳列してひろく來人の覽觀に供し併せて販賣をも爲すといふ。

●女子に英語科を廢す　讃州丸龜高等小學校にては協議の上女子に英語科を廢し男子にのみ敎授することに決したりと如何なる協議を遂げたるにや。

●山口女學校　基督教宣教師服部章三氏發起にて山口縣周防國山口町に女學校を設立せんと目下計畫中の由。

●齋貞女學校の虎列剌　京橋區新榮町六丁目四十六番地佛國齋貞女學校寄宿生中去る十二日より虎列剌病に罹る者多く當時患者九名翌十三日正午までに更に七名併せて十六名の患者一時に發生し中五名は間もなく死亡したりと云ふ。

廢娼記事

●營績するものあし

去月末にて群馬縣下の遊廓三ヶ所は廢止されたり。兼ての布告により他の七ヶ所に轉じ營業をつゞけ得るよしなるに、實際經營したるものは只二軒なりしよし。當路者は之にて妓樓を全廢すとも妓樓主人に左程の迷惑あるまじとの理を經驗したるが如し。

●妓樓の主人竄業を起す

雲州松江の貸席業狩田祐七は廓內百名餘の藝娼妓をして往々は悉く正業に就かしめんとの德義心より思ひ立ち先頃既に數ヶ所の桑園を購め製糸場を假設したる由なるが倘此上資本を卸し漸次擴張し他の藝娼妓にも普及せしめんとの見込なりと

●昨日の廢娼大懇親會

昨日、府下六團躰の會員相會し親睦し、今后運動の方針に付大に打合する所ありき、盛況は次號に細述すべし。

東洋英和女學校廣告欄

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の敎員孰れも熟達善良あり然して本校の敎授は實に完全なりとの世評を獲んとは本校の希圖する所あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

廣告

產婆講習生徒募集廣告

本院產科學校室內產婆養成所ニ於テ產婆講習生三十名試驗之上入學ヲ許ス家事ニ係累ナク且ツ年齡二十五年以上ノ婦人ニシテ望ノ者ハ本院事務室ニ就キ諸規則手續等承知ノ上來ル十一月五日限願書差出シ受驗トシテ來ル十一月八日午後一時出頭スヘシ

東京本鄕區元富士町

醫科大學第一醫院

女學生募集廣告

本校ハ英語及英文學ヲ敎授スル處ニシテ米國神學博士ペリン氏文學士ケート氏等其任ニ當ル殊ニミセスクウラ孃ハ本校女生徒ノ敎育ニ盡力ス入校志願ノ者ハ速ニ申込ムベシ

麴町區飯田町四丁目五番地

私立

自由英文學院

いらつめ

文藝美術流行記●粧專門婦人雜誌

毎月二回發兌●一冊郵税共三錢●十二部前金郵税共卅五錢●十月五日發兌第七十一號目次

懸賞文章和歌唱歌●足冷るを防ぐ法●日本音樂史●樹翠陰史の言文一致論●奴婢使用の心得●頭文三神（美妙齋及朧月子）●近眼速治法●美人と佳人●都下今日の書科價格●秋の七艸●日本古代女流の著書●金紅の意義●水引法方帛●紗たゝみ方●「シク」

東京神田區平永町　成美社

議員、官吏、有志者に呈す

拜啓益々御清安奉賀候國家の爲め重職に就き日夜御黽勉乍陰邦民の爲に鳴謝致居事に候陳者近年女子敎育頗かに進歩し二十三十にして初めて女學校に入る人も多く有之の勢ひ喜ばしきことゝ存候然るに既に一家の妻とあり特に多忙多用の貝人を內助せらるゝの令閨諸君は出でゝ學び給ふの暇ま固より少きの處ろ、世は息まず開化し婦人の地位著じるしく進歩致候に付きては、今後婦人同性の往來は彌よ自由になり女性が外に出でゝ宴會交際に周旋せらるゝと亦彌よ頻繁と可相成就其際賢夫人にして萬一普通一般の學識に欠くる如きと有之時は談話應接の砌り面白からぬと數多出來すべくと密かに掛念するものも少からず候。弊社此等の不便に痛歎し、毎月一回通信女學講義録と云へるを出版し、學校に通はれぬ婦人は家に居て獨學する樣、當今の女が心得べき學問を悉く講義し、一日四枚宛讀む時は家政、育兒、看病、衞生、生理、漢學、和學、英學、歌、百人一首講義、作文、算術、動植、理化學、萬國及日本の歴史、並に地理、等を一年にて滯りなく卒業し女學雜誌社の卒業證書を受くる規則を設け講義録の文章は分り易き上に一々假名を附け、且つ繪を入れ、尙不明瞭の所は質問に答へ專ら信切を旨とし、學校にて直ちに敎授を受くるよりも一層便利多く致候、毎月々謝卅二錢拂込の人には二百枚餘の講義録を月々送ると共に候目下既に第十卷を出版致たれども、今月新たに入學しる其第一卷より順次に稽古するも宜しきことに候。右の主旨何卒御賞玩被下弊社の精神御吹聽の程偏へに奉委賴候、凡そ賢夫人家に居て內を修むるの暇まく、當今の女學悉皆講習の上に內助の德一きわにして所謂烈夫賢妻共に國事に盡力するの美觀國中に充滿するに至らば邦家の幸福至大と存じ候敬白。

右通信女學講義録壹冊三拾二錢（全國無郵稅）每月十日出版、半年前金壹圓八拾錢。一年前金三圓五拾錢。女學雜誌と併せ購讀の人には壹割を減す。

東京市麴町區六番丁六番地

女學雜誌社

遞信省認可

●例年の通り來る十一月一日より三日間冬衣賣初仕候間賑々敷御來車不限多少御用向の程偏よ奉願上候
●よせきれ●見切反物種々
●直輸入品新着廣告
豫而歐州各國へ注文致置候男女洋服地新柄入荷仕且爲換相場之都合ニ依而頗ル廉價ニ出來仕候間此際一層勉強仕候

○新柄フランネル 各種
○上等毛織膝掛 各種
○流行柄毛織肩掛 各種
○廻シに及ビ鳶合羽 各種
○上等毛メリ安に及ビフランネル共他シャツ類 各種
○絹に及ビリンネルハンカチーフ 各種

十月

日本橋通一丁目
白木屋呉服店
洋服店

女學生大に改良の氣焰を吐く
女學生一躍して進歩發達す

『女學生』は最早池中のものに非ず、聯合女學校の艶麗才筆は意外にも地方女學生の喝采を得たり、

『女學生』は最早女學生自身のみを益するの時に非ず聯合女學校の万朶の紅硯は正に漸く氣焰を吐て他に向つて勉めんとす、

『女學生』は淡白の時代既に過ぎて漸く面白味の時代に入らんとす、錬習的の文勢は進化して漸く誘導界に乗り込まんとす、

『女學生』は終には全く女學生の手に落ちて女學雜誌の平易なるものと成り、社會の一方に女學生一團の旗幟を飜へし、以て女子一般を利して社會に益あらん事を望み進む、正に女學生活氣の溢るゝ泉となるべし幾億の

女學生及び活氣ある女子夫れ大に見よ

『女學生』六號よりは各校の欄を徹去し、雜居して優劣を競ひ、「社、團々」「説、切々」「話、縷々」「詞、麗々」「談、片々」等多くの欄に別けて掲載し始む、

近く發兌の日を待て見よ

女學雜誌社内
女學生發行部

定價

一冊。六錢	郵税。五厘	(但府内無郵税)	
十冊。五拾八錢	郵税。五錢	(同前)	
半年分	壹圓四拾三錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所
東京市麹町區下六番町六番地
女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY